２０１４年度　事業の概要

１調査と研究 …… 28
飛鳥藤原京の発掘調査 …… 28
平城京の発掘調査 …… 28
企画調整部の研究活動 …… 29
文化遺産部の研究活動 …… 30
●歴史研究室の調査と研究 …… 30
●建造物研究室の調査と研究 …… 31
●景観研究室の調査と研究 …… 31
●遺跡整備研究室の調査と研究 …… 32
埋蔵文化財センターの研究活動 …… 32
●保存修復科学研究室の調査と研究 …… 32
●環境考古学研究室の調査と研究 …… 33
●年代学研究室の調査と研究 …… 33
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究 …… 34
国際学術交流 …… 34
●中国社会科学院考古研究所との共同調査 …… 34
●中国河南省文物考古研究院との共同研究 …… 34
●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究 …… 35
●韓国国立文化財研究所との共同研究 …… 35
●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業 …… 35
●中央アジアにおける研究協力 …… 35
●ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業 …… 35
●カンボジアにおける共同研究 …… 36
●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業 …… 36
●コロンビア大学との研究交流 …… 36
海外からの主要訪問者一覧 …… 37
海外からの招へい者一覧 …… 37
研究者の海外渡航一覧 …… 38
公開講演会 …… 41
特別講演会（東京会場） …… 41
第114回公開講演会 …… 41
第115回公開講演会 …… 41
研究集会 …… 42
科学研究費等 …… 42
学会・研究会等の活動 …… 47
国が実施する事業等についての調査・協力 …… 48
●平城宮・京跡の整備 …… 48
●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査 …… 48
●キトラ古墳に関する調査研究 …… 48
発掘調査現地説明会・見学会 …… 49

２ 研修・指導と教育 …… 50
文化財担当者研修と指導 …… 50
京都大学（大学院）との連携教育 …… 50
奈良女子大学（大学院）との連携教育 …… 50
奈良大学への教育協力 …… 50

３ 展示と公開 …… 52
飛鳥資料館の展示 …… 52
平城宮跡資料館の展示 …… 52
解説ボランティア事業 …… 53
図書資料・データベースの公開 …… 53

４ その他 …… 54
刊行物 …… 54
人事異動 …… 58
予算等 …… 59
職員一覧 …… 60

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が、飛鳥・藤原地区において2014年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で２件、藤原京跡と飛鳥地域で４件である。また、立会調査は13件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

藤原宮跡大極殿院の調査（第182次）は、藤原宮大極殿院内庭南側における初めての本格的な発掘調査である。内庭の整備・利用状況の解明等を目的に、大極殿院南門北側の1450㎡を発掘調査した。調査期間は、2014年４月１日から2015年２月25日までである。

調査の結果、大極殿院内庭が朝堂院朝庭と同様に礫を敷いて整備されている状況を確認した。また、藤原宮造営に先立つ条坊道路側溝（先行朱雀大路東側溝、先行四条大路北側溝）、運河等を検出した。さらに奈良時代から平安時代までの掘立柱建物３棟や埋納遺構等を確認し、宮廃絶後の土地利用があきらかになった。このほか、造営期に破壊されたとみられる古墳の発見もあり、宮造営過程を知る手がかりを得ることができた。

藤原宮跡東方官衙北地区の調査（第183次）では、2012年におこなった第175次調査で一部を検出した礎石建物の全容と、官衙地区の様相解明を目的に、973㎡を発掘調査した。調査期間は2014年10月１日から12月25日までである。

調査の結果、礎石建物は桁行４間、梁行３間（10.8m×8.1m）で東西棟の総柱建物であることが確定した。礎石建物の礎石抜取穴からは、遺存状態の良好な佐波理鋺の破片が出土した。また、調査区の西端では、桁行５間以上、梁行２間（12.0m以上×7.2m）の床張りの大型掘立柱建物を検出した。両建物は南北の中軸がほぼ揃い、それらを結ぶ直線が藤原宮大極殿院の中心を通ることから、当初から計画的に配置された建物である可能性が高い。これらの建物はその配置や規模、構造からみて、区画内に配置された既知の官衙建物とは異なる、特殊な性格をもつものであったことが推測できる。また、これらの建物の発見により、東方官衙地区最南部に想定されてきた官衙区画は存在しないことが判明し、内裏東官衙地区では、過去に検出されている３つの官衙区画のうち、南の官衙Ｃは藤原宮期のある時点で増設されたものである可能性が高くなった。藤原宮全体の構造とその変遷を考える上で極めて重要な知見を得ることができたと言える。

さらに、調査区中央では、藤原宮造営に先立つ条坊道路（先行東一坊大路）と、同時期に坪を区画していた塀や溝を検出した。このほか、古墳時代を含むより古い時期の遺構の存在も把握し、藤原宮の成立にいたる長い歴史の解明に寄与する成果があがった。

飛鳥地域では、国営飛鳥歴史公園（キトラ古墳周辺地区）の整備工事にともなう発掘調査や立会を2007年度から継続的に実施してきているが、今年度は檜隈寺跡北側の丘陵の西側斜面の調査（第181-4次調査）で、檜隈寺の瓦を焼成した瓦窯１基を初めて検出した。調査期間は2014年５月15日から６月17日までである。瓦窯は西側に開口する有畦式平窯で、焼成室全体と燃焼室の半分程度を検出したが、灰原等は後世の掘削により遺存していなかった。窯体の残存長は約2.3m、最大幅は約1.8mである。その規模や構造の特徴から操業時期は10世紀頃と推定され、檜隈寺補修時の窯と考えられる。文献史料の乏しい檜隈寺の歴史に新たな知見を追加することができた。

2014年度の発掘調査にともなって実施した現地説明会および現地見学会は以下の通りである。

飛鳥藤原第182次調査（藤原宮大極殿院）
　現地説明会　2014年11月８日　森川　実
飛鳥藤原第183次調査（藤原宮東方官衙北地区）
　現地見学会　2014年12月14日　森先一貴

平城京の発掘調査

都城発掘調査部が、平城地区で2014年度に実施した発掘調査は、平城宮跡で５件、平城京跡で14件である。また立会調査は68件である。以下に主要な調査成果について概要を記す。

平城宮跡では、国土交通省による平城宮跡歴史公園工事関連施設造成・建設にともなって、東北官衙地区の調査を実施した（第542次）。調査区は６箇所にわたり、調査面積は計272㎡、調査は2014年10月14日から11月27日までである。調査の結果、総柱建物１棟、掘立柱建物３棟、塀１条のほか、多数の柱穴等、奈良時代の遺構を検出した。なお、本調査は遺構の状況を確認することが主目的のため、断割等は最小限に留めている。調査地周辺地域は、従来から官衙施設（東北官衙）が想定されていたが、これまで発掘調査事例がほとんどなかった。今回の調査で、奈良時代の建物遺構が複雑に展開することを確認し、従来の想定を裏付けるものとなった。また遺構面が地表面下約25～50㎝と非常に浅いことが判明した。

平城京内では、平城宮周辺と複数の寺院の調査を実施した。平城京右京一条二坊四坪・二条二坊一坪・

一条南大路の調査（530次）は、奈良文化財研究所本庁舎の建替事業にともなうものである。調査面積は3591㎡、調査期間は2014年４月14日から2015年２月18日までである。今回の調査では、平城京造営以前の秋篠川旧流路、および平城京造営時に旧流路をほぼ踏襲して整備した斜行大溝を検出した。斜行大溝の溝幅は約15m、深さ約2.5m。斜行大溝は最終的には敷葉・敷粗朶工法を用いて埋め立てられていることがあきらかになった。また、調査区やや南寄りで平城宮の西面中門である佐伯門から西に延びる一条南大路と、その南北両側溝等、条坊関連遺構を検出した。特に北側溝は３回の改修が認められ、大路側の南法面ではしがらみによる護岸が施されていた。このほか、調査区内では液状化現象による砂脈や噴砂丘等の地震痕跡を確認した。遺物の年代から歴史時代は奈良時代以降12～13世紀までと、13世紀以降の少なくとも２回は大規模な地震に襲われたことが判明した。

薬師寺東塔の発掘調査（第536次）は、2009年からはじまった東塔保存修理事業にともなう解体修理の一環で奈良県立橿原考古学研究所との合同調査である。調査面積は314.2㎡で、2014年７月８日に開始し、2015年４月22日に終了した。今回の調査では、創建時が切石積基壇（一辺13.3～13.4m）で、中世に乱石積基壇に改修され、近世には西面のみ乱石積基壇の外側に切石積基壇を追加し、さらに明治修理時に花崗岩の壇正積基壇へ改装したことが判明した。また、創建基壇の版築がほぼ完存しており、裳階柱礎石は明治修理時に据え直したとみられるものの、四天柱礎石や側柱礎石については多くが創建時のまま動かされていなかった。心礎も、創建時以来動かされておらず、土饅頭状の盛土地業上に据えられていた。また、西塔とは基壇規模は近似する一方、東塔の心礎には柱座や舎利孔がないこと、西塔の基壇外装は花崗岩に統一されるのに対し、東塔は複数の種類の石材を混用する等、東塔と西塔は基壇外装等に違いがみられた。

興福寺境内の調査（第540次）は、興福寺境内整備事業にともなうものである。調査区は西室北辺部（269㎡）、北円堂北面回廊の一部（138㎡）、北円堂南面（44㎡）の３ヶ所に分かれる。調査期間は2014年９月29日から2015年１月16日までである。西室北辺部では、礎石建物（西室大房）１棟、掘立柱建物（小子房か）１棟のほか、鎌倉時代から江戸時代前期の南北溝、土坑、江戸時代中期以降のカマドや土師器廃棄土坑、埋甕遺構、旧参道等を検出した。西室大房は、桁行10間、梁行４間の南北棟建物で、南半部を調査した2013年の第516次調査の成果と合わせると、建物の規模は南北約62.5m（212尺）である。また西室大房の西に並立する掘立柱建物も後世の土坑群により大半が削平されていたが、遺存していた柱穴から南北は西室大房と同じ62.5mと判明した。掘立柱建物は位置や規模から小子房の可能性があるが、掘立柱建物の東側柱筋と西室大房の西側柱筋との距離は約2.5mと近接しすぎているという問題点もある。また掘立柱建物は重複する土坑群の出土遺物から鎌倉時代には廃絶していたことがあきらかになった。また西室大房も江戸時代には廃絶し、西室周辺にはカマドや埋甕等の施設が造られていた。北円堂北面回廊は、2011年の第483次調査で樹木のために発掘できなかった北面回廊東半について調査をおこなった。調査では、北面回廊や近世・近代の土坑群を検出した。北面回廊は、後世の改変が著しく南側柱２基の礎石側柱を検出するにとどまったものの、基壇は東半が地山削り出しに対し、西半は比較的厚い粘土層を積んだ後、版築によって基壇土を造営すること等、北面回廊基壇の造成過程があきらかになった。北円堂南面では、灯篭据付穴と考えられる穴を３基検出した。そのうちの１基は北円堂南面階段の中軸ライン上にある。また３つの据付穴には５～10㎝の円礫が充填されていた。

このほかの平城京の調査では、平城京左京三条一坊十五坪の調査において（第534次）、南北に廂をもつ東西棟掘立柱建物１棟、掘立柱塀３条等を検出した。左京三条一坊十五坪は、従来の調査成果から十六坪と一体として利用されていたとされ、四面廂をもつ大型の掘立柱建物等が検出されている。今回の調査で検出した掘立柱建物も柱穴掘方の規模が1.5m、柱間は3.0mと大型で、奈良時代のなかでの詳細な時期は不明であるものの同坪における土地利用の一端を知ることができた。

2014年度の発掘調査にともなって以下の現地見学会を実施した。

現地見学会　2015年２月28日　青木　敬
（奈良県教育委員会主催の第４回国宝薬師寺東塔保存修理現場見学会の一環）

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の埋蔵文化財発掘技術者をはじめとする文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報の設備充実、国際的な文化財の調査や保護活用に関する

協力・援助と学術交流あるいは研修、飛鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動、以上のような事業を実施し、奈良文化財研究所がおこなう研究に係る様々な事業についての全体的・総合的な企画との調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

文化財担当者専門研修は、遺跡や遺物をはじめとする文化財の調査や、その成果の整理と保存・活用に関する高度で専門的な研修を年度ごとの計画にしたがって実施している。2014年度は、新庁舎建設、研修棟廃止にともない、仮庁舎で研修を実施するとともに、外部の宿泊施設利用に転換した。このため、2013年から、受講者の予算獲得を配慮し、できるだけ早く次年度の課程に関する通知をおこなうようにした。また、従来1課程であった報告書作成課程を報告書作成課程Ⅰ（編集基礎）、同Ⅱ（応用製作）に分けたほか、久々に自然科学的年代測定法課程を実施した。

文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースとして、全国遺跡報告総覧の設計をおこなうとともに、関係するデータベースである報告書抄録データベースの改良をおこなった。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、調査研究成果の電子化として、ガラス乾板・大判フイルム・35㎜スライドフイルム・遺構実測図・遺構カード・発掘調査日誌・軒瓦拓本カード等のデジタル化を進めている。

文化財保護に資する国際協力については、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修への協力事業として、2015年1月にバングラデシュで実施したワークショップに講師を派遣するとともに、バヌアツとブータンを対象にした個人研修では、写真研修をおこなった。

諸外国との国際共同研究としては、中国の社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究所、遼寧省文物考古研究所との共同研究、韓国の国立文化財研究所との共同研究がある。1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業は、西トップ遺跡を対象にした調査と修復を実施してり、目下、南祠堂の解体修復を進めている。このほか、文化庁受託事業によるベトナム・ハノイ林業大学との拠点交流事業において、出土木材の保存に関する共同研究および研究交流を実施した。さらに、東京文化財研究所と共同で実施するミャンマー文化省との拠点交流事業ではビュー文化の遺跡であるシュリクシェトラ遺跡を中心に共同研究および人材育成の事業をおこなった。

展示公開および普及については、飛鳥資料館での関係資料の研究とその成果の展示公開、平城宮跡資料館での宮跡調査の成果の展示公開等の事業を実施した。このうち、飛鳥資料館では、春期特別展「いにしえの匠たち―ものづくりからみた飛鳥時代―」、夏期企画展「第5回写真コンテスト「飛鳥の甍」応募作品展」、企画展「津田洋　大和の美仏に魅せられて」、秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどり―大地にきざまれた記憶―」、冬期企画展「飛鳥の考古学2014―縄文・弥生・古墳から飛鳥へ―」を開催した。

平城宮跡資料館では、秋期特別展「地下の正倉院展―木簡を科学する―」と、夏期企画展「平城京びっくりはくらんかい」、冬季にはミニ展示「発掘速報展　平城　2014」を開催した。これら展示関係については別項を参照されたい。

写真室では、研究所内の各種写真の撮影や、写真データの保管管理をおこなっている。また外部からの依頼を受けた写真撮影等もおこなっている。さらに近年では、各地の地方公共団体での埋蔵文化財写真の研修会等に講師として出席している。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2014年度は、興福寺・仁和寺・薬師寺・三仏寺・唐招提寺・東大寺や、奈良の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

興福寺の調査においては、『興福寺典籍文書目録』の続編を公表するための調査を続け、二条家記録第6函～第10函の調書を作成した。また第109函等の写真

撮影を実施した。

仁和寺における調査では、御経蔵聖教第53函～第65函の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第31函～第50函の資料目録を、『仁和寺史料目録編〔稿〕二』として作成・刊行した。仁和寺の聖教は御流聖教と称されて尊ばれてきたが、その内実が徐々にあきらかになりつつあると言える。

薬師寺調査では、第５函～第８函の調書原本校正と、第25函の写真撮影を実施した。

三仏寺が所蔵する歴史資料の調査においては、第４函・経典函等の調書を作成し、仏神像・銅鏡・木札等の調査・写真撮影を実施した。また、２躯の騎馬像について、文献調査・美術史的調査・胎内銘調査の成果をまとめ、２躯とも室町時代の勝手権現像であるとの見解を、『奈良文化財研究所紀要2014』に公表した。さらに、三仏寺に関連する資料が愛媛県の横峰寺に存在したので、その調査・写真撮影を実施した。

唐招提寺の調査においては、宝蔵・新宝蔵に所在する資料の確認調査・整理作業と、宝蔵第２函の写真撮影をおこなった。

東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教第78函～第80函の調査データ入力、第56函・第35函の写真撮影等をおこなった。

それ以外では、奈良の旧家が所蔵する古文書を調査した。また、生駒市有里町自治会等が所蔵する絵図の写真撮影を実施した。

また、氷室神社の宮司である、大宮家所蔵文書について、2013年度に奈良市と共編で刊行した報告書に基づいて、公開データベース、「大宮家文書データベース」の増補・更新をおこなった。

その他、調査協力の依頼を受けて、石山寺主催の文化財調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群および近代和風建築等に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復・活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法について再検証するための調査研究を、現存建築のみならず、修理等の祭に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2014年度におこなった主な調査研究内容を紹介する。

古代建築に関する調査研究では、2009年度に始まった法隆寺所蔵の古材調査を継続して進めた。法隆寺が奈良県文化財保存事務所に委託した、昭和修理に際し再利用不能と判断され、法隆寺に別途保管されている部材の整理および収納に際し、奈良文化財研究所が部材の実測、加工痕調査、写真撮影等をおこなった。2014年度までに金堂の旧部材の調査を概ね終了し、2015年度以降も調査を継続する予定である。

受託調査として、秋田県横手市増田伝統的建造物群保存地区に所在する町家の詳細調査をおこなった。増田は横手盆地南部に所在する商家町で明治期から昭和にかけて周辺の物資の集散地として栄え、妻入りで内部に磨き漆喰の内蔵を持つ特異な町家が櫛比する町並みが残る。増田の町並みを代表する旧松浦千代松家、佐藤又六家の２件について実測、写真撮影、所見執筆等の調査を現地に赴いておこなった。

また、山梨県富士吉田市に所在する北口本宮冨士浅間神社の社殿詳細調査をおこなった。北口本宮冨士浅間神社は、室町時代から江戸時代前期にかけての本殿３棟（重要文化財）もさることながら、富士講信者の寄進による江戸時代中期の社頭整備に関わる拝殿、神楽殿、手水舎等の社殿（県指定有形文化財）も近世社寺として非常に興味深いものである。これらについて詳細調査を実施した。

以上２件の調査は2015年まで継続しておこなう予定である。

海外関連では、2013年に日本語版を出版したベトナムティエンザン省カイベー市の集落保存対策調査報告書の英語版を出版した。

調査研究の一環として、奈文研所蔵資料のうち、建造物乾板写真の保護処理と画像デジタル化を継続しておこなっている。2014年度に処理した乾板は約700枚である。

このほか、国宝薬師寺東塔等の文化財建造物保存修理事業、橿原市今井町等の伝統的建造物群保存事業等について援助・助言をおこなった。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、「文化的景観」を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。特に2011年度からは諸外国との比較検討を視野に入れながら、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めてきた。また、文化的景観の具体的事例に関する取組としては、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について継続的に検討を重ねている。

2012年度後半からは、従前の取組成果をふまえつつ、文化的景観の定着と保存・活用の促進等をはかるため、外部の専門家・実務者を含む『「文化的景観学」検討会』を編成し、広い視野から文化的景観の概念・調査・表現方法・計画・技術・制度等の体系化に向けた検討を深めてきた。この中で、2013年度の検討内容を広く議論に付すため、５月には30名余りの外部参加を求めてワークショップを開催した。

諸外国との比較検討の観点からは、特に世界遺産における文化的景観（cultural landscape）に関わる諸資料等の調査研究を進め、日本の文化的景観保護施策に資するため日本語版資料を作成した。また、2011年度のアメリカ合衆国調査、2013年度のフランス調査に引き続き、インドネシア等の文化的景観の取組に関する調査を実施し、ヨーロッパやアジア各国の文化的景観に関わる取組について検討を進めた。

個別の文化的景観の調査・計画等に関する検討としては、京都市域の文化的景観や宇治茶生産（京都府南部）の文化的景観について基礎的調査をおこなうとともに、岡崎（京都市）や相川（佐渡市）の文化的景観保存計画策定について協力した。また、重要文化的景観に選定されている「宇治の文化的景観」（宇治市）や「四万十川流域の文化的景観」（四万十市）の整備計画策定、あるいは、「阿蘇の文化的景観」（熊本県）の調査等に関しても支援等をおこなっている。

なお、従前公表してきた重要文化的景観選定事例の文化的景観保存計画の概要資料集成についても、新たに選定された事例に関する追補作業を進めている。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、記念物に関する総合的な調査と研究を実施しており、特に「遺跡等整備」および「庭園」に関する調査研究の２つを柱としている。

遺跡等整備については、国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念、計画・設計、技術に関する調査研究をおこなっている。

遺跡整備に関する研究集会については、2014年度は「史跡等の整備・活用の長期的な展開」をテーマとして開催した。長期にわたる遺跡の整備・活用の事例および関連する分野における再生についての事例発表の後、総合討議をおこなった。また、2013年度に文化的景観研究集会と合同で開催した第３回遺跡等マネジメント研究集会「計画の意義と方法」の報告書を刊行した。

庭園については、日本庭園の歴史および保護に関する調査研究、基礎的資料のデータベース化をおこなっている。2011年度から、中世庭園の研究を継続しており、2014年度は「戦国時代の庭園」をテーマとして研究会を開催した。例年どおり、庭園史学・造園学だけでなく、考古学、建築史学、美術史学等の多分野の専門家が参加し、事例報告・研究発表と討論を通じて、最近の出土事例や関連分野における研究の進展状況が確認された。年度末には報告書を刊行した。

2012年度から奈良市教育委員会と連携研究の協定を結んで実施している「奈良市における庭園の悉皆的調査」については、2013年度に引き続き宗教法人が所有する庭園の現地調査に赴き、所有者への聞き取りや写真撮影等をおこなった。さらに、奈良県・奈良市の所有となっている庭園の現地調査もおこなった。

その他、昨年度に引き続きコロンビア大学との研究交流事業を実施した。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの４つの研究室は、それぞれの事業計画にしたがって埋蔵文化財に関する調査・研究を実施するとともに、国や地方公共団体の要請に基づき専門的な助言や協力をおこなっている。2014年度の各研究室の活動内容は、以下のとおりである。

●保存修復科学研究室の調査と研究

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究ならびに調査手法の研究・開発を推進するため、１）出土遺物等の材質構造調査、埋蔵環境調査ならびに保存処理の開発研究、２）遺構の安定化法に関する基礎研究、および３）文化財の非破壊材質構造調査法としてのミリ波およびテラヘルツ波の応用研究を実施している。１）では①炭化した紙のラマン分光分析による炭化温度の推定、②紫外線スキャナの開発研究、③木造建造物の塗装彩色調査、④金属製遺物の埋蔵環境調査に取り組んだ。２）では外界気象条件や覆屋内温熱環境、析出物の種類や分布、水質に関する実測調査をおこなうとともに、土中と覆屋内空気における熱、水分および酸素、溶質の移動を考慮した同時移動解析をおこなった。３）では、①テラヘルツ分光イメージングにより、漆器の塗装構造に関する非破壊調査、②新規に導入予定のテラヘルツイメージング装置の測定試験を実施し、文化財への適用性を検討した。また、「石造文化財の劣化と保存に関する新たな展開」をテーマとした研究集会を開催した。

受託事業として、喜界町出土金属製遺物の保存処理（喜界町）、群馬県金井東裏遺跡出土ガラス製遺物の材質・構造調査（群馬県）、国宝薬師寺東塔顔料等分析調査（奈良県）、平城宮跡遺構展示館の保存活用に関する調査研究事業（文化庁）等10件を実施した。連携研究としては、クスノキ製臼保存処理に関する保存科学的研究（大分市）、潤地頭給遺跡出土準構造船の真空凍結乾燥法による保存研究（糸島市）、松平忠雄墓所出土品の保存処理に関する保存科学的研究（幸田町）の３件を実施した。

国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務（文化庁）ならびに特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（文化庁）において、劣化原因究明と修理のための材料調査をおこなった。また、高松塚古墳の石室石材をより安全に静置するための安定化支持具を製作し、取り付けをおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

2014年度も、東日本大震災の復興事業にともなう発掘調査や整理作業に対する支援を継続的におこなった。磯草貝塚（宮城県）では、出土した動物遺存体を同定して、発掘調査報告書の原稿を執筆した。波怒棄館遺跡（宮城県）では、約25,000点の動物遺存体を同定した。2015年度末刊行の発掘調査報告書に向けて、今後とも作業を継続していく予定である。復興関連以外では、神谷地・小出遺跡（秋田県）、南鴻沼遺跡（埼玉県）、丸山Ｂ遺跡（東京都）、六反田南遺跡（新潟県）、木曽田遺跡（三重県）、藤原宮跡（奈良県）、東名遺跡（佐賀県）等から出土した動物遺存体や人骨を分析した。また、平城京右京一条二坊四坪や藤原宮大極殿院で、古環境復原の調査をおこなった。

復興関連調査である宮城県の磯草貝塚では、整理対象資料を最小限に限定して報告をおこなった。縄文時代前期後葉～中期前葉の貝層から出土した約2,000点の動物遺存体を同定し、採貝活動や漁撈活動が活発であるのに対し、狩猟活動は低調であったことをあきらかにした。秋田県の神谷地・小出遺跡では、縄文時代中期の竪穴住居跡の炉から出土した約2,000点の焼けた動物骨を同定し、サケ科魚類を積極的に漁獲していたことを指摘した。また、晩期の土器棺墓から出土した焼骨を分析し、焼人骨の一部を土器に納めた再葬であったことをあきらかにした。奈良県の藤原宮跡では、宮造営期の運河から出土した人骨を分析し、５～12歳程度の小児の遺体が遺跡周辺に放置されていたと推測した。

研究成果の発信として、日本考古学協会、日本学術会議、日本文化財科学会、日本動物考古学会、日本哺乳類学会等の学会やシンポジウムで研究発表をおこなった。社会還元や普及事業として、平城宮跡資料館、福井県美浜町、中学校職場体験等で、一般向けの展示や講演をおこなった。継続的に実施している現生標本の収集と公開では、東北地方の貝殻標本等を収集し、国内外からの標本見学に対応した。

●年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では、年輪年代学により考古学・建築史学・美術史学・歴史学等、文化財に関わる諸分野に資するべく、木製文化財の調査・研究をおこなっている。対象は、出土遺物、建造物、美術工芸品等多岐にわたり、これらの年輪年代調査を実施するとともに、調査手法の研究開発にも取り組んでいる。奈良文化財研究所で開発したマイクロフォーカスＸ線CT技術やデジタル画像による調査手法は、非破壊を原則とする文化財調査に有効であるため、調査対象の拡大と活用をはかっている。また、標準年輪曲線の拡充等年輪年代学に関する基礎研究のほか、木製文化財の樹種同定調査をおこなっている。

このうち、法隆寺金堂古材調査、および薬師寺東塔の解体修理にともなう調査では、それぞれ100点以上の部材について、年輪数が多く、部材表面でデジタル画像による非破壊年輪計測ができるものを可能な限り悉皆的に調査した。そして当初材だけでなく中近世の修理部材についても対象とし、それぞれの建造物の建立年代、および建立後の修理の経過を推定する資料を得ることを目的とした調査を進めている。

マイクロフォーカスＸ線CT装置を使った研究では、高月観音の里民俗資料館との連携研究を進め、長浜市高月町宇根の春日神社に伝わる神像群（男神立像３躯・女神坐像１躯）の非破壊年輪年代調査を実施し、そのうちの男神立像１躯から原木伐採の上限年代として1087年の年輪年代を得た。

また、マイクロフォーカスＸ線CT装置は近年に出力の向上と高解像化のためデバイスを交換しており、これを活用して木製文化財以外の対象についても調査をおこなっている。2014年度は、佐賀県鳥栖市の永田１区６号墳出土ガラス小玉、および、香川県まんのう町の安造田東３号墳出土モザイク玉を撮像し、内部構造や製作技法の考究に資する情報を得る等の成果があがっている。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、2006年４月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡研究、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

2014年度は、遺跡およびその調査法業務では、古代の寺院と官衙関連遺跡、井戸遺構の資料の収集・整理を継続するとともに、遺跡の性格認定の指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究をおこなった。収集・補訂した寺院・官衙関係資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、主な遺構と遺物、建物等の詳細データと、地図や遺跡全体図、建物図面等の画像データを、奈良文化財研究所のホームページ上で公開している。また、都城発掘調査部と共同で、古代官衙・集落研究集会の報告書『長舎と官衙の建物配置』と資料集「宮都・官衙と土器」（官衙・集落と土器１）を作成した。また、新たに、科学技術・学術審議会の建議「災害の軽減に貢献するための地震火山観測研究計画」に基づく、「考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」事業に着手した。これは2018年度までの５ヵ年計画で進めており、2014年度は発掘調査報告書および発掘調査現場での災害痕跡情報の収集・整理・分析をおこない、エクセル等へのデータ入力を実施した。さらにデータベース基本構造の設計・プログラミング、システムサーバーの導入等をおこなった。

いっぽう、文化財の調査技術業務では、計測・測量、探査の各分野を中心に活動をおこなった。計測・測量分野では、三次元レーザースキャナーやSfM／MVS等を用いた文化財計測手法・システムについての研究をおこない、実用化に向けた開発を進めた。また、薬師寺東塔・東大寺・弁天塚古墳（以上、奈良市）、島内地下式横穴墓（宮崎県）等、現地で遺構計測を実施するとともに、前年度までに収集した東日本大震災復興関連調査等のデータ解析・報告書作成をおこなった。探査分野では、アレイ式地中レーダー機器の試験等をおこない、効率的な探査手法の開発に着手した。また、各地の地方公共団体や大学等と連携して、平城宮・東大寺西塔および戒壇院・薬師寺東塔（以上、奈良県）、大萱古窯跡群（岐阜県）、甲立古墳（広島県）、実相寺古墳（大分県）等で現地作業と解析をおこなった。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、中国、韓国、カンボジアの３カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、ベトナムやミャンマーに対して技術移転・人材育成に関する事業をおこなういっぽう、奈文研以外の機関がおこなう支援協力事業にも参加している。

●中国社会科学院考古研究所との共同調査

2014年度は、北魏洛陽城出土遺物の調査を２回実施する予定であったが、年度途中で予算の見直しがあり、短期間の遺物調査１回となった。12月に２名を派遣し、北魏洛陽城出土遺物の調査と比較研究の資料として北朝鄴城出土資料の調査を実施した。８月には中国社会科学院考古研究所が主催する「東亜古代都城及鄴城考古・歴史国際学術研討会」に１名を派遣し、平城宮・京の発掘成果の発表をおこなった。年度末には北京大学で開催された学会に１名を派遣し、北魏、鄴城の出土瓦の研究成果を発表した。同時に中国社会科学院考古研究所と今後の共同調査について協議をおこなった。

●中国河南省文物考古研究院との共同研究

奈良文化財研究所と河南省文物考古研究院は、2010年３月16日締結の『友好共同研究議定書』第４条と『友好共同研究覚書（修訂）』の関連規定にもとづき、鞏義市黄冶・白河唐三彩窯跡の発掘出土品の整理、調査研究を共同で継続して実施してきた。

2014年度は共同研究第Ⅲ期５カ年計画の５年目にあたる。2002年から2004年にかけて発掘調査した河南省鞏義市・黄冶窯址出土資料の整理と、2005年から2007年にかけての鞏義市・白河窯址出土資料の整理作業を進めるとともに、報告書（中国語版・日本語版）の刊行にむけての打ち合わせをおこなった。あわせて、中国における唐三彩関連資料の調査を実施した。共同研究にかかる相互の交流は下記のとおりである。

2014年８月24日から８月28日まで、奈文研は玉田芳英、大澤正吾（以上、都城発掘調査部）、難波洋三（埋蔵文化財センター）、丹羽崇史（企画調整部）、巽淳一郎（客員研究員）の５名を派遣し、報告書『鞏義黄冶窯』中国語版の刊行、および次期５カ年計画の策定に関する協議をおこなうとともに、河南省における関連資料の調査を実施したほか、江蘇省揚州市におい

て唐三彩関連資料の調査をおこなった。

2014年10月20日から10月24日まで、河南省文物考古研究院は５名の研究者を派遣し、奈文研を訪れ学術交流をおこない、関連資料を見学したほか、日本の研究者と関連する課題について共同研究と討論をおこなった。

●中国遼寧省文物考古研究所との共同研究

2014年度の遼寧省文物考古研究所との共同研究は、５カ年計画で開始した「遼西地域の東晋十六国期都城文化の研究」の４年目である。

研究交流活動として、12月16日から19日の４日間、中国遼寧省文物考古研究所員を招へいした。招へいしたのは、呉炎亮所長・李霞副主任・高振海所員・肖俊涛所員の４名で、短い滞在期間のため、慌ただしくはあったが東京と奈良を訪問し、東京では、東京国立博物館において主として文化財修復技術に関する展示を視察していただいた。奈良では、共同研究に関する協議をおこなうとともに、唐招提寺、薬師寺を訪問した。薬師寺では東塔基壇の発掘調査状況を視察していただいた。

年度末の３月17日から21日の５日間には、研究員６名を瀋陽市の遼寧省文物考古研究所に派遣し、金嶺寺遺跡出土瓦・台座石（３～４世紀頃）ならびに大板営子遺跡出土金属製品（４世紀頃）の調査をおこなった。瓦の調査では、これまでに調査した瓦のほとんどを一室に集合して並べ、種類ごとの同笵関係や製作技法の検討をおこなった。そして、この検討結果にもとづき調書補訂や実測・拓本作業を実施、製作技法上の特徴を良く示す瓦については、その部分を重点的に撮影した。台座石は旗竿を挿し込むためのもので、上面ならびに側面の蓮華文について補足調査と拓本作成をおこなった。金属製品の調査では、出土遺物一覧の確認作業をおこない、主として鉄鏃の実測ならびに撮影を実施した。

また、関連する遺物の調査として、遼寧省博物館に展示されている瓦を観察し、金嶺寺遺跡出土瓦との比較検討をおこなった。

これらの調査に加えて、2015年度の詳細な共同研究事業計画について協議し、これまで蓄積してきた調査研究成果の公表方法等についても協議をおこなった。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所とは、2005年12月に研究交流協約書を締結し、共同研究を実施してきた。2014年度はその第３期の４年目にあたり、協約にもとづき「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および相互派遣による発掘調査交流を実施した。

共同研究については、日韓双方の協議を経て設定した課題に基づき、４回の派遣と１回の受け入れを実施した。研究成果は５ヵ年計画の最終年度にとりまとめる予定である。

発掘調査交流では、当研究所より国立慶州文化財研究所へ研究員１名を派遣し、新羅王京遺跡等において共同発掘調査を実施した。派遣期間は約１ヵ月半であった。また奈文研において国立慶州文化財研究所から研究員１名を受け入れ、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区、平城地区）において共同調査を実施した。受け入れ期間は約２ヵ月であった。期間中には、相互の派遣・受け入れ先において研究報告会をおこなった。

●西アジア諸国等の文化財修復保存協力事業

アフガニスタン、イラクおよび周辺諸国を対象として、文化遺産保存修復に関わる事業を東京文化財研究所と共同で実施しているが、2014年度は、現地調査は実施されず、現地から日本への研修生受け入れも実施されなかった。４月30日に、2013年度より問題となっていたバーミヤーンの東大仏の足をドイツ隊が復原した問題に関する研究会が東京で開催されたので、研究員１名が参加した。

●中央アジアにおける研究協力

2014年度は、現地調査への参加や、現地から奈良文化財研究所への研修生受け入れも実施されなかった。このため、文献資料等の収集に努めるとともに、６月14・15日に鎌倉女子大学で開かれた日本西アジア考古学会に研究員１名が参加した。2013年度まで奈文研からも研究員を派遣していたキルギスのアク・ベシム遺跡に関する発表ほかの研究発表があった。また、７月３日に東京文化財研究所が招へいしたキルギスからの研修生による研究発表会があり、研究員１名が参加した。

●ベトナム・出土木製品保存に関する拠点交流事業

ベトナム林業大学との拠点交流事業として、タンロン皇城遺跡から出土した木製遺物を含むベトナム出土木製遺物の調査および保存に関する研究を共同でおこなうことを目的としている。2014年度は、①東南アジアにおける遺跡出土木製遺物の保存の問題に関するワークショップの開催（ベトナム林業大学）、②タイ

における木造沈船の保存に関する討議（タイ）、③インドネシアにおける出土木製遺物の保存の現状と課題に関する国際研究集会の開催（インドネシア・ガジャマダ大学）、④京都大学生存圏研究所に招へいされたベトナム林業大学Nguen Duc Thanh氏とともにおこなったベトナム産木材の成分分析法に関する共同実験、に取り組んだ。

●カンボジアにおける共同研究

2014年度は、南祠堂の再構築に向けた各種試験を前半期におこなった。まず現状の基壇土の土質特性を調べるために、掘込地業中位の面で簡易貫入試験や斉賀試験、載荷試験等をおこなった。併行して、何種類かの改良土を製作し試験をおこなった。その結果、基壇土：粘土粉末：ラテライト粉末：消石灰の配合比を１：0.1：0.1：0.2と定め再構築に臨んだ。2014年７月に掘込地業中位に改良土による版築層を築き、その上に同年８月から最下段のN25を積み始めた。2014年度３月の段階でN22の積み上げが終わっている。今後は、鋭意再構築を進め2015年度半ばには、南祠堂の再構築を終了し、北祠堂の解体に入る予定である。

●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業

2014年度は、前年度に引き続き東京文化財研究所が受託した拠点交流事業の内、考古分野に関して再委託を受けた。11月23日から29日に研究員２名と文化財写真の専門家１名を派遣し、ピィの考古学フィールドスクールおよびシュリクシェトラ遺跡において文化財写真に関するワークショップを開催した。撮影台を現地で入手可能な材料で組み立てる等の工夫をおこなった。受講者はスクールの講師を中心に計19名である。また、１月17日から26日に３名を招へいし、奈良文化財研究所において文化財写真に関して、写真撮影だけではなくデジタル資料の登録・保管とデータの長期保存に関する講義も含めた研修をおこなった。

●コロンビア大学との研究交流

アメリカ合衆国ニューヨーク市所在のコロンビア大学中世日本研究所、および建築・計画・保存大学院と交わした研究協力、および交流に関する覚書にもとづき、2011年４月１日から５年間にわたり、研究者の交流等をおこなうものである。2014年度は、９月17日にコロンビア大学において講演会を共催し、清野孝之（考古第３研究室長）が“Ideal management of historic parks: From past to present to future”、星野安治（年代学研究室研究員）が“A Review of the Application of Dendrochronology to Japanese Cultural Heritage”を題目に講演し、意見交換をおこなった。

●今井　晃樹：中国／14.8.5～8.8／国際シンポジウムでの研究発表／運営費交付金
●石村　智：フィジー／14.8.6～8.12／平成26年度文化庁拠点交流事業によるフィジーでの現地調査／東文研（文化庁受託）
●高妻　洋成：ベトナム・タイ／14.8.7～8.12／拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業ワークショップ開催および出土木製品調査／文化庁受託
●和田　一之輔：ベトナム・タイ／14.8.7～8.12／拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業ワークショップ開催および出土木製品調査／文化庁受託
●田代　亜紀子：ベトナム・タイ／14.8.7～8.12／拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業ワークショップ開催および出土木製品調査／文化庁受託
●平澤　毅：台湾／14.8.9～8.14／台湾の名勝地の現状に関する現地調査等／科研費
●佐藤　由似：カンボジア／14.8.14～9.10／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●庄田　慎矢：イギリス・フランス・スイス／14.8.18～8.31／研究打ち合わせ、資料調査、学会発表／科研費
●廣瀬　覚：韓国／14.8.18～10.2／慶州国立文化財研究所との発掘調査交流／運営費交付金
●森本　晋：カンボジア／14.8.23～8.26／アンコール地域における上智大学調査資料に関する調査／科研費
●田代　亜紀子：カンボジア・タイ／14.8.23～8.29／アンコール遺跡群調査および研究打ち合わせ／科研費
●菊地　淑人：インドネシア・シンガポール／14.8.24～8.30／海外文化的景観（世界遺産）に関する現地調査／運営交付金
●玉田　芳英：中国／14.8.25～8.28／京都大学大学院講義のための資料調査研究／他機関負担（京都大学大学院）
●丹羽　崇史：中国／14.8.25～8.28／河南省文物考古研究院との協議ならびに資料調査／運営費交付金
●大澤　正吾：中国／14.8.25～8.28／河南省文物考古研究院との協議ならびに資料調査／運営費交付金
●難波　洋三：中国／14.8.25～8.29／河南省文物考古研究院との協議ならびに資料調査／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア／14.8.25～8.31／プレアヴィヒア遺跡の調査／科研費
●森先　一貴：チェコ／14.8.25～9.1／ミクロフ国際人類学会議への参加・研究発表／助成金・運営交付金
●渡辺　晃宏：韓国／14.8.27～9.1／研究分担者をつとめる科学研究費による研究の遂行のため／科研費
●杉岡　奈穂子：チェコ・スイス・フランス／14.9.7～9.21／The 18th International Microscopy Congress 2014（Plague）にて成果発表 欧州で流通したインド製唐棒布の材料調査／科研費
●清野　孝之：アメリカ／14.9.15～9.23／コロンビア大学との研究協力および交流／運営費交付金
●星野　安治：アメリカ／14.9.15～9.23／コロンビア大学との研究協力および交流／運営費交付金
●若杉　智宏：韓国／14.9.24～9.26／日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究にかかる調査／運営費交付金
●田代　亜紀子：イギリス／14.10.6～10.19／資料収集・庭園観光調査／科研費
●佐藤　由似：台湾・中国／14.10.9～10.18／海から見た近世カンボジアに関する調査／助成金（笹川研究助成）
●海野　聡：韓国／14.10.10～10.13／韓国古建築調査／科研費
●前川　歩：韓国／14.10.10～10.13／シンポジウム「新羅の王宮 建築物 復元」への参加・発表／先方負担
●小野　健吉：イギリス／14.10.10～10.19／資料収集・庭園観光調査／科研費
●脇谷　草一郎：ベルギー／14.10.12～10.19／SWBSS 2014における研究発表／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア／14.10.16～10.22／西トップ遺跡の調査修復／助成金（朝日文化財団）
●加藤　真二：中国／14.10.18～10.25／北京で開かれるシンポジウムへの出席および天津、済南で関連の調査／私費（研修）
●森本　晋：台湾／14.10.20～10.24／PNC（太平洋近隣会）2014年次大会「博物館コンピューティング」で発表／運営費交付金
●石橋　茂登：韓国／14.10.27～10.29／「高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査」にともなう韓国文化財庁、国立扶余文化財研究所へのヒアリングおよび陵山里古墳群見学／文化庁受託
●降幡　順子：韓国／14.10.27～10.29／「高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査」にともなう韓国文化財庁、国立扶余文化財研究所へのヒアリングおよび陵山里古墳群見学／文化庁受託
●前川　歩：韓国／14.10.27～10.29／「高松塚古墳墳丘整備の在り方に関する調査」にともなう韓国文化財庁、国立扶余文化財研究所へのヒアリングおよび陵山里古墳群見学／文化庁受託
●杉山　洋：カンボジア／14.10.27～10.31／西トップ遺跡の調査修復／助成金（朝日文化財団）
●田代　亜紀子：インドネシア／14.10.27～11.6／科研研究調査および文化省受託拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業ワークショップ準備／科研費
●諫早　直人：韓国／14.10.30～11.3／日韓交渉の考古学―古墳時代―第2回共同研究会における通訳および資料調査への参加／科研費
●海野　聡：中国／14.11.1～11.3／中国文献資料・街並み・庭園調査／科研費
●伊東　隆夫：中国／14.11.4～12.12／科研研究課題の研究遂行のための調査および研究資料の収集／科研費・先方負担
●佐藤　由似：カンボジア／14.11.5～12.31／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●森本　晋：タイ・カンボジア／14.11.11～11.15／アンコール関連資料の調査ならびにアンコール地域における上智大学調査資料調査打ち合わせ／科研費
●加藤　真二：韓国／14.11.12～11.16／アジア旧石器協議会への出席、海外共同研究の成果についての発表／運営費交付金
●石橋　茂登：アメリカ／14.11.12～11.18／在外青銅器関係資料調査／科研費
●杉山　洋：カンボジア・ミャンマー／14.11.17～11.25／西トップ遺跡の調査修復およびミャンマーに於ける遺跡保存と活用／科研費
●石村　智：ミャンマー／14.11.23～11.29／ミャンマー文化遺産保護に関する拠点交流事業の考古分野におけるワークショップでの講義／文化庁受託
●森本　晋：ミャンマー／14.11.23～11.30／ミャンマー文化遺産保護に関する拠点交流事業の考古分野におけるワークショップでの講義／文化庁受託
●小野　健吉：韓国／14.11.25～11.28／慶州市・新羅文化遺産研究院主催「慶州の古代宮殿遺跡の望ましい活用に関する国際シンポジウム」招聘参加／先方負担
●石村　智：カンボジア／14.12.3～12.9／科研費「アンコール王朝末期の総合的歴史学建築」のための資料調査／科研費
●杉山　洋：カンボジア／14.12.3～12.10／西トップ遺跡の調査修復／助成金（朝日文化財団）
●今井　晃樹：中国／14.12.3～12.12／洛陽、鄴城出土資料の調査／運営費交付金
●栗山　雅夫：中国／14.12.3～12.12／洛陽、鄴城出土資料の調査／運営費交付金
●森本　晋：フランス／14.12.7～12.15／ギメ美術館・フランス極東におけるアンコール関係データベースの調査／科研費
●田村　朋美：中国／14.12.8～12.17／中

国南部におけるガラス製遺物の調査／科研費・運営費交付金
●星野　安治：ペルー／14.12.12～12.23／植生調査、遺跡年輪試料に関する研究打合せ、考古・歴史年代測定に関する現状調査／先方負担
●惠谷　浩子：中国／14.12.15～12.19／ACCU2014年度国際会議出席／先方負担
●杉山　洋：カンボジア／14.12.17～12.26／カンボジア・アンコール・トム内の水利区画についての調査／科研費
●青木　敬：韓国／14.12.27～12.30／新羅・朝鮮王陵の構築技術調査および現地調査／科研費
●田代　亜紀子：タイ／15.1.4～1.8／科研「古代・中世東西回廊―ミャンマー・タイ跨境における文化交流・交流網の歴史的動態」研究打ち合せ・アジア歴史地理情報会学会出席／科研費
●加藤　真二：バングラデシュ／15.1.8～1.18／ ACCU実施の「文化遺産ワークショップ2014」講師／他機関負担（ACCU）
●佐藤　由似：カンボジア／15.1.14～1.27／海から見た近世カンボジアに関する調査／助成金（笹川研究助成）
●高妻　洋成：インドネシア／15.1.15～1.21／拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業国際研究会参加とインドネシア出土木製品調査／文化庁受託
●田村　朋美：インドネシア／15.1.15～1.21／拠点交流事業ベトナム出土木製品保存事業国際研究会参加とインドネシア出土木製品調査／文化庁受託
●松村　恵司：カンボジア／15.1.17～1.21／アンコール文化遺産保護に関する研究協力／運営費交付金
●上田　浩司：カンボジア／15.1.17～1.21／アンコール文化遺産保護に関する研究協力にかかる西トップ遺跡の調査研究ならびに監査・視察／運営費交付金
●田中　康成：カンボジア／15.1.17～1.21／アンコール文化遺産保護に関する研究協力にかかる西トップ遺跡の調査研究ならびに監査・視察／運営費交付金
●高梨　泰裕：カンボジア／15.1.17～1.21／アンコール文化遺産保護に関する研究協力にかかる現状確認／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア／15.1.17～1.24／カンボジア・西トップ遺跡の調査修復／運営費交付金
●井上　直夫：カンボジア／15.1.19～1.24／カンボジア出土資料の写真撮影／科研費
●飯田　ゆりあ：カンボジア／15.1.19～1.24／カンボジア出土資料の写真撮影／科研費
●高田　祐一：カンボジア／15.1.19～1.24／アンコール遺跡群における砂岩材の調査／助成金（朝日文化財団）
●田村　朋美：韓国／15.1.28～2.3／大韓文化財研究院2015国際学術大会に参加および光州出土ガラス製品の調査／科研費
●加藤　真二：中国／15.2.4～2.7／平城宮跡展示館の基本設計修正のための資料調査／国交省受託
●諫早　直人：モンゴル／15.2.8～2.16／匈奴・突厥墓出土金属製品の調査／科研費
●森本　晋：カンボジア・ラオス／15.2.10～2.15／アンコール期の遺構・遺物の記録方法に関する調査／科研費
●佐藤　由似：カンボジア・ミャンマー／15.2.10～3.14／アンコール文化遺産の保護に関する研究協力およびミャンマーにおける文化財調査／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア・ミャンマー／15.2.13～2.23／カンボジアおよびミャンマーにおけるポストアンコール期遺跡の調査／科研費
●森本　晋：ミャンマー／15.2.19～2.25／アンコール朝と平行する時期の遺跡・遺構・遺物の記載方法に関する現地調査／科研費
●田代　亜紀子：ミャンマー／15.2.20～2.24／科研「古代・中世東西回廊ミャンマー・タイ跨境における文化交流・交易網の歴史的動態」現地調査／科研費
●石村　智：ミャンマー／15.2.20～2.26／ミャンマーにおけるポストアンコール期関連遺跡の現地調査／科研費
●森先　一貴：ロシア／15.2.24～3.1／科研「北東アジア新石器時代の広領域分散型社会における相互影響の解明に向けた考古学研究」に関わる資料調査／科研費
●星野　安治：グアテマラ／15.2.28～3.15／ボーリング調査、植生調査／科研費
●平澤　毅：中国／15.3.5～3.11／中国の名勝地の現状に関する現地調査等／科研費
●馬場　基：台湾／15.3.10～3.12／科研「古代中世東アジアの関所と交通政策」による資料見学のため／科研費
●神野　恵：台湾／15.3.10～3.12／科研「古代中世東アジアの関所と交通政策」による資料見学のため／科研費
●浦　蓉子：台湾／15.3.10～3.12／科研「古代中世東アジアの関所と交通政策」による資料見学のため／科研費
●諫早　直人：韓国／15.3.11～3.16／国立歴史民俗博物館共同研究に係る資料調査、第２回研究会および全羅南北道西南海岸地域の墳墓踏査／先方負担
●杉山　洋：カンボジア／15.3.17～3.20／カンボジアにおけるポストアンコール遺跡の調査／科研費
●小池　伸彦：中国／15.3.17～3.21／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●清野　孝之：中国／15.3.17～3.21／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●今井　晃樹：中国／15.3.17～3.21／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●廣瀬　覚：中国／15.3.17～3.21／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●石田　由紀子：中国／15.3.17～3.21／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●栗山　雅夫：中国／15.3.17～3.21／遼寧省文物考古研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●高妻　洋成：オーストリア／15.3.18～3.23／漆喰資料の調査（ウィーン世界博物館所蔵大名屋敷模型の漆喰壁）／科研費
●鈴木　智大：韓国／15.3.20～3.22／韓国慶州の古建築および遺跡の建築史的調査／科研費
●清野　孝之：韓国／15.3.25～3.27／韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●廣瀬　覚：韓国／15.3.25～3.27／韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●小田　裕樹：韓国／15.3.25～3.27／韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●諫早　直人：韓国／15.3.25～3.27／韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●玉田　芳英：韓国／15.3.25～3.27／京都大学大学院講義のための資料調査研究および発掘現場の視察／他機関負担（京大大学院）
●若杉　智宏：韓国／15.3.25～3.27／韓国国立文化財研究所との国際共同研究（研究計画の協議および調査）／運営費交付金
●今井　晃樹：中国／15.3.27～3.30／北京大学で開催される学会への参加／運営費交付金
●森本　晋：イタリア／15.3.28～4.6／国際学会「考古学におけるコンピューターの応用と数量的方法（CAA）」出席／運営費交付金

公開講演会

特別講演会（東京会場）

2014年10月25日

◆難波　洋三「年代を測るものさしの作り方」

各論の発表に先立ち、考古学的な年代決定法と自然科学的な年代決定法の概要を説明し、それぞれの特徴と問題点を整理した。まず、考古学的方法のうち層位学的方法に関して、同一層位に新旧型式が併存する場合に想定しうる原因を説明した後、電話ボックス取付用の大型公衆電話機を例として、型式学的方法におけるルジメントの検出の重要性を指摘した。また、自然科学的方法については、年輪年代法とAMS-炭素14年代測定法を取り上げて説明し、後者の問題点も検討した。

◆尾野　善裕「古代土器の年代推定―都の調査・研究成果と地方の視点―」

遺跡の種類を問わず、発掘調査によって普遍的に出土する傾向の強い土器・陶磁器は、調査した遺跡の暦年代を推定する上での重要な手がかりである。とりわけ、暦年代推定根拠が豊富な都城遺跡の出土品は、時間の尺度としての精度の高さから参照されることも多いが、土器・陶磁器には強い地域色があり、都城遺跡の様相をそのまま地方の遺跡に適用して暦年代を論ずることには問題が多い。しかし、物資の求心力が強い都城へは各地の土器・陶磁器が搬入されており、特定地域の搬入品のみを抽出するならば、時間の尺度として各地の遺跡への応用が可能であることを指摘した。

◆渡辺　晃宏「時を測るものさしとしての木簡」

木簡は史料としてだけでなく、そこに書かれた時の記載によって、遺構・遺跡や遺物に時の定点を与える役割を果たす。ただ、木簡が書かれた時とその廃棄時期にはずれがある。この点を二条大路木簡のSD5300とSD5100の文書木簡と荷札木簡を例に説明し、両者の埋没の時期差にも言及した。そして、時の明示がなくても年代決定の重要な手がかりになることを、木簡の地方行政組織や地名の表記から考えた。また、701年の大宝令の施行が、年号導入と時の記載位置の変化（冒頭から末尾へ）を生み、時の記載法の画期となったことを述べた。

◆神野　恵「土器の年代と木簡の年紀」

年代をはかる「ものさし」には、土器や瓦を新旧関係でならべた相対年代と、文献史料や出土文字資料から得られる絶対年代があり、これらを組み合わせることで、遺跡の年代を決定していく必要があることを述べた。発掘調査や整理作業の過程では、土器の年代観と、共伴する木簡の年代が矛盾することがあり、各々の研究者間による活発な議論がおこなわれた事例を、２例紹介した。発掘調査や整理研究の成果は、こういった議論を経たものであり、通常は知ることができない研究の舞台裏での苦労を、一般の方々に紹介することができた。

◆石田　由紀子「白鳳か天平か、瓦が解決した「薬師寺論争」」

瓦は建築部材の一部であることから、瓦の年代を知るには、創建年代等の記録が残る建物と、そこに使われた最初の瓦（創建瓦）の把握が基本である。それらに加えて、瓦当文様や製作技法の変化、笵傷進行等、さまざまな視点からの検討を加え、瓦の編年研究をおこなっていることを述べた。そのうえで、薬師寺の堂塔が本薬師寺からの移建か非移建かで長年の議論が続いていた「薬師寺論争」について、その解決に瓦の研究が寄与した事例を紹介し、瓦の年代決定方法について論じた。

◆星野　安治「木の年輪で作った年代を測るものさし―年輪年代学の成果―」

年輪年代学は、自然の法則を利用して年代を測る自然科学的年代測定の一つで、樹木の年輪が形成された年を１年という高い時間分解で誤差なく特定することができる。奈良文化財研究所では、この研究分野の導入にわが国で初めて成功し、現在では過去約3000年間の年代を測る「ものさし」ができている。また、マイクロフォーカスX線CTによる非破壊調査技術の開発等も世界に先駆けておこなってきた。本講演では、年輪年代学の概要や奈文研における取組、そして年輪を使った木材産地推定の可能性等、年輪で作ったものさしの今後の展望について紹介した。

第114回公開講演会

2014年6月28日

◆松村　恵司「藤原京の地鎮と富本銭」

2007年に藤原宮の大極殿院南門の調査で出土した地鎮具の高エネルギーX線CTによる内容物の調査と、その取り出し作業の過程を紹介。この地鎮具が『日本書紀』に記された最古の地鎮祭にともなう可能性を指摘した。埋納された富本銭は飛鳥池遺跡出土銭とは異なる新種の富本銭であり、持統８年（694）もしくは、文武３年（699）に、記録のある鋳銭司で生産された可能性が高い。２種の富本銭の銭文や形制の違いを詳細に比較検討した。平瓶に納められていた富本銭と水晶の数は、ともに陽の極数とされる９点であった。これには九を重ねる重九（重陽）の意味があり、藤原宮の長久と平安を願う地鎮具であったと考えられる。

◆桑田　訓也「役人を育てる」

平城宮には、約7,000人の役人が勤務していた。彼ら役人を育てるシステムは、どのようなものだったのか。

役人を育てる役所には、大学寮・典薬寮・陰陽寮の３つがあり、明経・医・天文等９つの学科が置かれていた。各分野の専門家になることを期待されたのは、中下級役人の子どもであり、貴族の子どもは、成績に関わらず、一定の年齢になると自動的に退学・就職することになっていた。

奈良時代初頭には、役人を育てる役所は充分に機能していなかった。その背景の１つとして、渡来人に頼り過ぎていたことが指摘できる。

◆若杉　智宏「壁画古墳の世界 ―星宿と四神―」

本発表では、キトラ古墳の天文図の分析から、日本の古墳壁画の源流を考察した。

キトラ古墳天文図の原図は天体に関する高度な専門知識に基づいて作られたと推測できる。しかし、作業にあたった画師は専門知識をもたなかったため、キトラ古墳天文図の黄道の位置や石室西壁に描かれた白虎の向きに誤りが生じたと考えた。

中国大陸・朝鮮半島の壁画古墳との比較からは、朝鮮半島の古墳の天文図に、キトラ古墳天文図ほど精緻なものはないことを確認した。このことより、キトラ古墳壁画の故地は中国大陸であったと結論づけた。

第115回公開講演会

2014年10月4日

◆松村　恵司「和同開珎１文の価値は？」

発行当初の和同開珎１文がどれほどの価値であったのか、その公定価値に関する史料を検討し、１文が１日の労賃に相当することをあきらかにした。また、奈良時代の物価変動を通観し、天平宝字年間に急激に進行したインフレの原因が、旧銭の和同開珎に対して10倍の価値をもつ新銭万年通寶の発行（760年）と、連年の飢饉と疫病の流行、恵美押勝の乱（764年）が複合的に作用した可能性を指摘した。日当も宝亀２年（771）には15文まで上昇するが、１日の労賃で購入できた米の量は、奈良時代

を通じて２～３升とほとんど変化のないことを指摘した。

◆芝　康次郎「植物種実からみた古代の食生活」

遺跡出土の植物種実には、食用植物が多く含まれる。特に、便所遺構やそれに類する遺構から見つかるものは、食生活の一端をダイレクトに示してくれる。

近年、平城宮東方官衙地区で見つかった糞便遺構からは、数万点におよぶ植物種実が出土した。メロン仲間、キイチゴ属、アケビ、サンショウ、カキノキ、イチジク、エゴマ、ナス等37種類にのぼる。これらは同時代の他の便所遺構と基本的には類似した内容である。木簡や文献史料に記されたものも多く、これらを総合的に検討することで、より豊かな古代の食生活が復元できると考えられる。

◆惠谷　浩子「文化的景観の味わい方」

文化的景観は文化財としての保護の仕組が比較的新しく、また認知度が低い。よって、本講演ではまず、文化的景観の基礎的情報の共有のため、保護制度創設の背景と保護の仕組を示した。その上で、非常に広いエリアを対象とする文化的景観ゆえの課題として、①価値共有の必要性、②価値表現のむずかしさ、の２点を指摘した。さらに、その課題に対する景観研究室での取組として、エリア全体をひとつの鳥瞰図として視覚的に表現するイラスト「文化的景観全覧図」の作成について紹介した。

研究集会

◆庭園の歴史に関する研究会

2014年10月25日

2014年度は、「戦国時代の城館の庭園」をテーマとして開催した。

研究報告では、庭園史・建築史・文化史の研究者が、戦国城館の庭園遺構について、住宅史からみた戦国城館、室町文化の地方伝播について、それぞれ発表をおこなった。事例報告では、大内館跡、小田原城跡 御用米曲輪、岐阜城 織田信長居館跡の調査担当者が、いずれも近年確認された庭園遺構について報告をおこなった。その後の討議では、城館特有の立地環境や機能に注意しつつ、庭園史・住宅史を中心に分野横断的な研究を進めていくことが、検出遺構の評価や庭園史・建築史における通史的研究において重要であることが確認された。（高橋 知奈津）

古代官衙・集落研究会（第18回）

2014年12月12日～13日

2014年度は「宮都・官衙と土器」と題して研究集会を開催した。

研究報告は、高橋照彦「都と地方の土器」、森川実「平城宮とその周辺の土器様相」、佐藤敏幸「東北の城柵官衙と土器」、依田亮一「東国の官衙と土器」、中島恒次郎「土器から考える遺跡性格」、岡田裕之「出雲における国府と集落の土器様相」、三舟隆之「文献から見た官衙と土器」の計７本である。発表終了後、玉田芳英都城発掘調査部副部長の司会による総合討議をおこない、都城・官衙から出土する土器の特徴と歴史的背景に関する活発な討議が交わされた。

参加者は、地方公共団体・大学関係者等計148名、アンケートでは96％が有意義であったとの回答が寄せられた。なお、今回の研究集会の研究報告を2015年度に刊行する予定である。

このほか、2013年度に実施した研究集会の研究報告『長舎と官衙の建物配置』を2014年12月に刊行した。（小田 裕樹）

保存科学研究集会

2015年1月23日

石造文化財の中でも、古墳の石室、石棺、石彫像、石灯篭、磨崖仏等は、屋外において大地と接した状態にある。石材の風化は、石造文化財が置かれている環境と石材の種類によるところが大きい。特に軟岩と呼ばれる砂岩や凝灰岩から作られた石造文化財の風化とその保存には、多くの課題が山積している。今回の研究集会は、このような石造文化財の保存の現状と課題をテーマに、「石造文化財の保存研究会」との共催でおこなわれた。７件の研究発表の後、総合討議をおこなった。総合討議においては、石造文化財を取り巻く環境の影響、保存処理の問題について、活発な意見交換がおこなわれ、今後の石造文化財の保存研究に大きな方向性を与える研究集会となった。（高妻 洋成）

古代瓦研究会（第15回）

2015年2月14～15日

「８世紀の瓦づくりⅣ―平城宮式軒瓦の展開２　6282-6721系―」をテーマとして、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂においてシンポジウムを開催した。参加者は地方公共団体・大学・研究機関関係者等120名である。14日は、川畑純「平城宮の6282-6721型式軒瓦」、宮崎正裕氏「平城京の6282-6721型式軒瓦」、大坪州一郎氏「南山城地域の6282-6721型式軒瓦」、古閑正浩氏「河内地域の6282-6721系軒瓦」、翌15日は、池田征弘氏・中川猛氏「播磨の6721系軒瓦―いわゆる本町式軒瓦について―」、佐川正敏氏・藤木海氏「東北地方の6282-6721系軒瓦」、新田剛氏「伊勢出土の6719A」、早川和賀子氏「壱岐・豊前出土の6284型式軒瓦」の研究報告および資料の観察会をおこなった。15日午後には、清野孝之の司会により総合討議をおこない、平城宮・京、恭仁宮出土6282-6721型式の製作技法の特徴と年代観、各地の6282-6721系の文様・製作技法との比較検討等について活発な議論が交わされた。

なお、今回のシンポジウムの成果は、2016年度に刊行する予定である。

（清野 孝之）

科学研究費等

◆木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報集約と知の結集

代表者・渡辺 晃宏　基盤研究（S）継続

Ａ木簡資料の情報取得の効率化では、⑴アノテーションツールを削屑約35,000点の整理に活用し、その機能向上をはかった。また、活用対象を削屑以外の全木簡に広げ、従来の写真台紙に代わる情報集約システムツールの基本画面案を作成した。⑵引き続き所内外の木簡画像の蓄積に努めた。

Ｂ木簡資料に関する様々な知の結集では、⑴画像による文字検索について、ユビキタスな字形検索サービスの設計と試作をおこなった。今後様々なクライアントアプリケーションへの実装が期待できる。⑵古代木簡の文字の標準字体一覧作成のための基礎作業をおこない、異体字関係を検討した。⑶個々の木簡に関する研究文献データベースの枠組を構築し、「木簡研究文献一覧」として「木簡字典」に搭載して公開するとともに、研究分担者の小口雅史氏編「日本古代史研究文献目録データベース」（法政大学国際日本学研究所）と「CiNii」（国立情報学研究所）へのリンクを貼った。⑷Mokkanshopに搭載している地名検索について、単独でWeb公開するためのシステム開発をおこない、異表記についても検索できるよう機能拡張を検討した。

◆マルチチャンネル機器を利用した高速遺跡探査技術の開発

代表者・金田 明大　基盤研究（A）継続

導入機器について実際の遺跡における試験的な利用を進めている。

地中レーダー探査および磁気探査では日

本の遺跡にあわせた計測方法の検討をおこなった。日本においては小面積や複雑な形状の範囲を迅速に計測する必要や、位置決定手段として代表的なGPSによる計測が困難な市街地や林の中等での利用を可能とする手法を考える必要があり、より柔軟に利用可能な機材を製作し、試験を進めている。

電磁探査機を用いた研究では、近年必要性が高まっている石垣、横穴墓、窯といった傾斜地における内部の空隙や状況の把握を目的とした調査手法の開発を目的とし、機器の選定、導入と薬師寺東塔基壇、岐阜県大萱古窯跡群等での試験的な計測をおこない、良好な成果を得ることができた。

◆アンコール遺跡群を事例とした考古情報資源共有化に関する研究

代表者・森本 晋　基盤研究（A）新規

本研究は、カンボジアのアンコール遺跡群において蓄積されている考古資料の調査・研究成果を共有するための有効な手段の開発を目指している。４ヶ年計画の２年度にあたる2014年度は、国内の研究機関が所蔵している従来の研究成果である、実測図や写真等の資料を整理して電子化する作業を継続しておこなった。また、フランスの博物館での資料データベースの実態調査もおこなっている。電子化資料の標準化では、用語の調査をおこなって標準用語の提示の準備を進めている。電子化した写真にメタデータを付与する研究では、もともと得られているメタデータの多寡をどう扱うのかが課題となっている。

◆中国新石器時代における家畜・家禽の起源と、東アジアへの拡散の動物考古学的研究

代表者・松井 章　基盤研究（A）新規

弥生時代に日本へ伝播した稲作農耕の起源地といわれる、中国浙江省の新石器時代前期河姆渡文化の田螺山遺跡と、新石器時代後期の良渚遺跡群のひとつ、美人地遺跡出土の動物骨を、2014年5月に調査した。美人地遺跡の分析報告は現在、中国語に翻訳を済ませ印刷中である。2014年9月には、アルゼンチンで開催されたICAZ（国際考古動物会議）にて、「DEVELOPMENT OF ANCIENT HORSE CULTURE IN EAST ASIA」と題するセッションを設け、成果を公表した。さらに2014年10月には、田螺山遺跡の環境考古学研究の中間報告を、共同研究をすすめている浙江省文物考古研究所にて発表し、今後の調査方針も含め活発な議論をおこなった。その成果も現在、原稿をそろえ、翻訳・編集中である。このほか、骨格標本の3次元計測によるデータベース化をすすめており、奈良文化財研究所のホームページ上での公開準備中である。

◆歴史的文字に関する経験知の共有資源化と多元的分析のための人文・情報学融合研究

代表者・馬場 基　基盤研究（A）新規

歴史的な文字に関して、研究者個人や研究グループ、調査研究組織は、様々な経験知を蓄積している。本研究では、情報学の技術・手法を導入しつつ、これらの経験知の研究資源化を進め、研究の深化と発展を目指す。

具体的には、経験知顕在化のための「気付きメモ」蓄積や手法の研究、OCR等による歴史的文字の数値的把握の蓄積、歴史的文字へのメタデータ付与手法の研究等である。

2014年度は、奈良文化財研究所および東京大学史料編纂所の研究グループを中心に気付きメモの蓄積（計約300件）をおこなった。さらに、研究会を開催し、手法の確立を目指して議論をおこなった。

◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究

代表者・松村 恵司　基盤研究（B）継続

４ヶ年計画の３年目にあたる本年度は、官道と駅、国府を入れた古代の国郡図に和同開珎出土遺跡を落とし、全国出土分布図を完成させた。これにより出土遺跡を古代の歴史的環境下で分析する条件が整った。その結果、出土遺跡の多くが七道（駅路）沿いに分布する傾向が明確になり、歴史地理学による古代道路（駅路・伝路）の路線復原や駅家比定の研究成果を取り入れながら分析を進めている。また、当研究所の「古代地方官衙関係遺跡データベース」と「古代寺院遺跡データベース」を利用して、出土遺跡と官衙関連遺跡、寺院との関係の調査も進めている。さらに「和同開珎出土遺跡データベース」の公開に向けて、データベースの設計に着手した。

◆中国漢代の木槨・木棺材を用いた年輪年代学の確立と用材選択の意義

代表者・光谷 拓実　基盤研究（B）継続

2014年度は、江蘇省の儀征博物館と揚州文物考古研究所、さらに江西省広州にある南越王宮博物館の３か所を訪問し、漢代の出土木棺、木槨材のなかから年輪解析用に約50点のサンプルを収集した。各試料からの年輪データの収集はまだ未計測のものもあるが、2013年度、儀征博物館の出土木材（広葉杉）を用いて作成した約500年間分の暦年未確定の年輪パターンに対し、本年度収集した儀征博物館の出土木材のなかの５点の年輪パターンは照合が成立し、約500年間の暦年未確定の年輪パターンをさらに補強する年輪データとなった。

◆弥生時代における青銅器生産の総合的研究

代表者・難波 洋三　基盤研究（B）継続

2014年度は、京都国立博物館所蔵の北部九州製武器形祭器を中心とする弥生時代青銅器13個体のICP分析を実施した。武器形祭器の精密な元素分析例は銅鐸以上に少なく、貴重なデータを得ることができた。たとえば、大分県浜銅剣２本は2013年度分析した兵庫県古津路銅剣と同様に錫濃度が高くヒ素とアンチモンの濃度は低く、中細形B類銅剣の製作時期が外縁付鈕１式末の銅鐸よりも古いことがさらに明確となった。長大なため重量偏析の影響が想定される広形銅矛６本については鋒と関でサンプリングをしたが、その影響は明確でなかった。

◆文化財および美術工芸材料のナノ構造と物性・機能の解明

代表者・北田 正弘　基盤研究（B）継続

高松塚古墳顔料、紀元頃の銅/鉄複合斧、油絵具と明治期油絵、日本刀、15世紀の西洋美術等の微細構造を電子顕微鏡等で研究した。高松塚古墳顔料では、橿原考古学研究所所蔵の赤顔料がHgS、緑がマラカイト、青がアズライトであることを確定し、このほかに顔料下地の白鉛鉱等の存在、顔料の劣化等をあきらかにした。銅/鉄斧は鋳鉄上に青銅で溶湯めっきした構造をあきらかにし、これは防食と色彩付与のためと推定した。明治期油絵では、鉛白、酸化クロム、オーカー、硫酸Ba等からなるナノ構造、現代油絵具７種のナノ構造を調べた。

◆東アジアを中心とした名勝地の保護に関する研究

代表者・平澤 毅　基盤研究（B）継続

本研究は、日本における名勝地保護に関する知見をふまえ、広く東アジア地域諸国等の現状を把握し、施策や実践等の比較研究をおこなうことにより、各国の名勝地保護の取組等の交流を促進し、名勝地概念とその実践を共有することを目的とする。

2014年度は、台湾・中国についてヒアリングおよび現地調査を実施したほか、中国・韓国・台湾関係専門家を招聘して講演会「東アジアの文化的景観」および『東アジアの名勝地保護に関する研究座談会』を開催するとともに、日本をはじめとした名勝地保護関係資料をまとめた。

◆歴史と現状からみた庭園の観光資源としての可能性に関する研究―欧州との比較から
代表者・小野 健吉　基盤研究（B）新規

本研究は、観光学の視点で庭園を取り上げ、わが国における庭園の観光利用の歴史的過程を考察し、欧州との比較研究をふまえて日本庭園がもつ観光資源としての可能性を考究することを目的とする。

2014年度は、歴史調査として、『蔭涼軒日録』等の庭園関連記事のDB化、『都林泉名勝図会』の図像解析とともに、栗林公園を事例として近代における名勝指定による社会的機能付与の在り方について考察した。また、海外調査として、英国のストウ、スタッドリー王立公園等の現地調査ならびに資料収集をおこない、歴史・立地とアクセス・活用・運営の観点で考察した結果、ナショナル・トラストによる適切な運営がそれらの庭園の地域資源ならびに観光資源としての機能発現に大きく寄与しているとの結論を得た。

◆東大寺を中心とする南都の未整理文書聖教の復原的調査研究
代表者・吉川 聡　基盤研究（B）新規

本研究の主眼は、東大寺に膨大に存在する未整理の文書聖教について、基礎的な調査を進めるとともに、その検討から、伝来過程や組織の内実等を理解しようとするものである。あわせて、南都の寺社等に集積された文書聖教について、その把握につとめ、伝来状況等をあきらかにすることを意図している。

初年度である2014年度は、昨年度までの科研「南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究」で調査した分を引き継ぎ、その続きである、新修東大寺文書聖教の第78函～第80函の調査を実施した。東大寺関係の近世文書や、中世経巻等が存在した。また、中村純一寄贈文書中にある明治初年の日記の一部を翻刻している。

●アンコール王朝末期の総合的歴史学の構築
代表・杉山 洋　基盤研究（B）新規

本研究は、これまで余り研究の進んでいなかったアンコール王朝末期からポストアンコール期の研究を進め、アンコール王朝崩壊の謎に迫るとともに、その後の歴史を考古学や歴史学・建築史学・美術史学等、多角的な研究によってあきらかにしようとするものである。

2014年度は、ポストアンコール期の王都であるロンヴェーク遺跡の調査に関して、文化芸術省との調整をおこなうとともに、現地で予備調査をおこなった。西トップ遺跡では、南祠堂解体にともなう周辺調査をおこなうとともに、遺跡周辺における仏教テラスの調査をおこなった。

◆「鎖国」下の日本における清朝陶磁の需要と影響
代表者・尾野 善裕　基盤研究（C）継続

本研究は、教科書的な「鎖国」史観の影響下に、これまで注目されていなかった清時代の中国陶磁の日本輸入の実態をあきらかにしようとするものである。最終年度にあたる2015年度には、補足調査として国内旧家伝来品の調査を重点的に実施するとともに、中間成果報告として位置づけていた『魅惑の清朝陶磁』展を、共催新聞社の協力を得て、奥田元宋・小由女美術館（広島県）、パラミタミュージアム（三重県）の２館に巡回させた。また、調査・研究内容の一部を日本陶磁協会刊行の『陶説』に寄稿し、成果の公表に努めた。

◆古代東アジアにおける土木技術系譜の復元的研究
代表者・青木 敬　基盤研究（C）継続

2014年度は３年目となり、2014年12月に韓国における古代土木技術の発掘例の探索と関係書籍の収集、調査関係者への意見交換を目的とした韓国での資料調査を実施し、韓国での資料収集をほぼ終えた。国内における都城や古代官衙についての検討結果は、『古代官衙』（考古調査ハンドブック11、ニューサイエンス社）にまとめた。このほか、寺院基壇構築技術については2014年12月に帝塚山大学市民大学講座にて発表し、古墳でも沖積地における墳丘構築技術について新知見を得たので、同月実施の第３回城の山古墳シンポジウム（胎内市）にて「城の山古墳の墳丘構造」と題して発表した。

◆中世日本と東アジアの木造建築における架構システムに関する比較研究
代表者・鈴木 智大　基盤研究（C）継続

本研究は、木造建築の架構システムに着目し、日本・中国・韓国の比較をおこなうことで、東アジアにおける木造建築の技術および、その設計論理を解明する試みである。

４ケ年計画の３年目となる2014年度は、前年度に引き続き当該期の中国における建築の変革と日本の比較をおこない、「法隆寺慶長修理の繋貫と中国建築の穿挿枋」（日本建築学会大会学術講演、2015年予定）として、論考をまとめた。また中国北京市・天津市・河北省・山西省、韓国慶州市において、建築遺構の現地調査をおこなった。

◆東アジアにおける鉛釉陶器の原料とその時間的・地域的特徴に関する研究
代表者・降幡 順子　基盤研究（C）継続

本研究は、鉛釉の原材料の変遷、さらに時代とともに変化する製品構成との関連と生産技術を究明することを目的とする。今年度は９世紀前半から10世紀後半の沿海州地方から出土した鉛釉陶器の特徴をまとめた。鉛原料は複数地域のものが検出され、胎土の化学組成の特徴とも対応していることが判明した。さらに、国内の生産地遺跡出土資料等における、化学的特徴および製作技法に関する知見を得るための調査を実施し、平安時代中期以降に比定される鉛ケイ酸資料について比較データの収集をおこなった。

◆平安時代出土文字資料の動態的歴史分析―〈荷札の終焉〉にみえる木簡の機能
代表者・山本 崇　基盤研究（C）継続

本申請研究は、平安時代木簡の性格と機能を律令制の変質過程のなかで合理的に説明することを課題としている。2014年度には、兵庫県、埼玉県、静岡県、鳥取県、熊本県等の平安時代出土木簡・墨書土器の熟覧調査と写真撮影を継続した。このほか、全国出土の平安時代木簡2699点の情報、古代因幡伯耆関係木簡を集成し公表し、『全国木簡出土遺跡・報告書綜覧2014』（私家版）を編集した。

◆ツガ年輪による近世以降の建造物の年代測定および用材産地推定手法の確立
代表者・藤井 裕之　基盤研究（C）継続

懸案であった古材と現生材のパターン接続は、ツガ単体では2014年度も未達成に終わった。しかし、大阪市住吉区大海神社西門のヒノキ材を調査した結果、ヒノキの暦年標準パターンと高知城のツガ現用木部材（2013年度発表）の双方に同調するパターンが得られ、これにより、2008年の當麻寺大師堂における成果にもとづいて、ツガ古材パターンに暫定的に付与してきた年代が再現した。また、本州から北海道にいたる地域で調査を継続し、北海道江差町旧中村家住宅（明治20年代）では、ツガ材の産地研究に関わる知見を得た。以上の成果は、2015年７月開催の日本文化財科学会第32回大会で発表する予定である。

◆中国由来の木彫像の用材観
代表者・伊東 隆夫　基盤研究（C）新規

2014年度は神像彫刻の調査を中心に研究を進めた。中国の湖南省一体に広まっていた多数の神像彫刻（deity statue）がアメリカのミルウォーキーにあるアンティー

ク店に保管されており、アメリカの研究者の紹介で2013年度に訪問し、約300体の神像から樹種同定用の試料の提供を受け、樹種同定をおこなってきた。その一方で、神像体内から発見された銘文（inscription）の中国語による解読および英文への翻訳を中国人研究者の協力により進めてきた。

◆「復元学」構築のための基礎的研究
代表者・海野 聡　挑戦的萌芽研究　新規

2014年度は、復元学の構築に向けて、年度前半には大内裏図考証の輪読研究会を開催した。後半には考証学と復元学の関係をあきらかにするため、復元に関する歴史を整理し、復元の対象を検討した。

また建築史の世界では、復元に通じるテーマとして、ジブリの立体建造物展という展覧会が開かれたことが注目される。過去に存在しない、物語等の創作物が復元の対象となるかという点を研究会で議論しており、この展覧会に対する検討により、復元との差別化をはかることができた。

◆東北アジアにおける金属器の拡散と在地社会の変化に関する考古学的研究
代表者・庄田 慎矢　若手研究（A）継続

本研究は、近年暦年代の根本的な見直しが進む東北アジアにおける金属器拡散のシナリオを再構成し、同地域における金属器受容の特性を人類史的に位置付けようとするものである。最終年度となる2014年度は、これまでにおこなってきた石製の武器・装身具についての議論をまとめるとともに、この時期に生業の中で重要な位置を占めていたイネの栽培形態について、従来の説で想定されていたような焼畑による栽培ではなく、当初から水田で栽培されていた蓋然性が高いことを炭素・窒素安定同位体分析を用いて議論し、日本文化財科学会およびInternational Symposium on Biomolecular Archaeology（Basel, Switzerland）にて発表した。

◆19世紀の東西文化交流でもたらされた染色・絵画材料のナノ構造解明
代表者・杉岡 奈穂子　若手研究（A）継続

本研究は、主に透過電子顕微鏡等の先端的分析手法を用いて、染色・絵画材料の微細構造から東西文化交流の発展をあきらかにすることを目的として研究を進めている。19世紀初頭に新しい青色として流行したプルシアンブルーで染色されているヨーロッパ更紗の染色剤の微細構造の観察をおこなったが、プルシアンブルーは熱に弱い色材で、試料作製方法に検討を要した。研磨条件を種々検討した結果、繊維内に分布した析出物を捉えることができた。この結果を、変色や繊維の強度低下を引き起こすとされているFeの挙動の解明につなげる。

◆東アジアにおける「西のガラス」の流通からみた古代の物流に関する考古科学的研究
代表者・田村 朋美　若手研究（A）継続

本研究は、化学分析を通して、日本列島で出土する「西のガラス」の生産地を推定し、ユーラシア大陸の東西を結ぶ交易ルートの解明と、その時期変遷をあきらかにすることを目的とする。本年度は、安造田東３号墳（香川県まんのう町）出土のモザイクガラス玉について、各種の自然科学的手法を用いた材質・構造調査を実施した。その結果、製作技法、基礎ガラスの種類、着色技法のいずれも西方地域のガラスと関係が強いことがあきらかとなった。とくに、基礎ガラスの材質がササン系の植物灰ガラスであったことから、西アジアが本資料の生産地の第一候補であると考えている。

◆古代東アジアにおける建築技術の重層性と日本建築の特質
代表者・海野 聡　若手研究（A）新規

東アジアにおける古代建築の関連性をあきらかにし、日本建築の特質を検討する研究の初年度にあたる。

2014年度は韓国の資料収集および現存遺構の調査を中心におこなった。なかでも、日本の倉庫建築にみられる妻梁に着目し、日本と韓国の建築構造に関する比較をおこなった。また、研究の中軸となる日本の古代における建造物の維持管理に関する法律を整理し、その成果を日本建築学会計画系論文集にて公表した。

◆三次元計測による飛鳥時代の石工技術の復元的研究
代表者・廣瀬 覚　若手研究（B）継続

本研究は、三次元計測の手法を用いて、飛鳥時代の石材加工に関するデータを収集し、当該期の石工技術を詳細かつ体系的に復元することを目的とする。最終年度となる2014年度は、羽曳野市野中寺所在のヒチンジョ池西古墳石槨のデータの補足処理と図面作成をおこなった。また、明日香村牽牛子塚古墳石槨の寺山石製外周石材、および飛鳥寺出土不明竜山石製品の観察と三次元レーザー計測を実施した。さらに、これまでに収集した飛鳥時代の石工技術に関する三次元データを整理し、画像作成の補足をおこなった上で、研究成果報告書を編集・刊行し、過去４年間の検討成果を総括した。

◆南洋群島の戦争遺跡の保存と活用：特に水中文化遺産に重点をおいて
代表者・石村 智　若手研究（B）継続

本研究の目的は、日本が国際連盟委任統治領として1922年から1945年にかけて統治した南洋群島（現在のミクロネシア地域）に残る、日本統治時代の遺構および第二次世界大戦に関連する戦争遺跡を調査し、その実態を解明することである。特に同地域に多数存在する沈没艦船等の水中文化遺産の把握に重点をおく。

最終年度である2014年度には、パラオの沈没艦船について追加的な水中調査をおこない、研究をまとめる作業をおこなった。その成果は林田憲三編著『水中文化遺産論集（仮題）』として2015年に出版予定である。

◆弥生時代の地域間関係と青銅器の受容
代表者・石橋 茂登　若手研究（B）継続

本研究は弥生時代の青銅器を主な分析対象として、遺物の移動を通じて青銅製祭器の受容の実態をあきらかにすることを目的とする研究である。

本年度は引き続き資料整理と現地調査等をおこない、岡山県、山口県、福井県、米国で資料調査を実施した。集落出土銅鐸の出土地について整理考察した。また明治時代のH=S=マンローの論文掲載図の銅鐸について検討した。成果は論文として発表する予定である。

◆甲冑編年の再構築に基づくモノの履歴と扱いの研究
代表者・川畑 純　若手研究（B）継続

本研究の目的は、古墳時代の甲冑編年を型式学的な分析視点から再構築し製作順序を仮定することで、資料の製作順序と一括資料中における扱いとの間に関連があるのかどうかをあきらかにすることである。

本年度の作業により、鋲留短甲の生産過程において明確な系統分化がみられること、またその系統差は各地域の古墳群単位においてある程度まとまった集積をみせることがあきらかとなった。これにより、上記の視点から甲冑製作と授受の様相について理解するための背景があきらかになったといえ、最終年度に向けた分析の基礎が完成した。

◆装飾古墳を安定に保存するための環境制御法の開発に関する研究
代表者・脇谷 草一郎　若手研究（B）継続

本研究は、墳丘の被覆条件が石室内の結露性状におよぼす影響について検討するものである。互いに近接する３基の装飾古墳

を対象として、2014年度は各古墳の結露性状に着目した石室内温熱環境調査と、局所的な外界気象条件の実測調査を継続して実施した。2015年度は、墳丘の被覆条件として表面の植生と封土の土量に着目し、これらが石室内の結露発生頻度、発生箇所におよぼす影響について検討する。また、被覆条件を考慮した解析モデルを構築し、現状で結露が発生する要因の抽出と、それらを抑制する手法について検討する。

◆古代東アジアにおける食器構成と食事作法の変化に関する比較研究

代表者・小田 裕樹　若手研究（B）継続

本研究は、飛鳥時代後半から奈良時代にみられる「律令的土器様式」の成立・展開とその歴史的背景について、東アジア諸国における食器構成と食事作法の変化との比較という観点からあきらかにすることを目的とする。

研究２年目にあたる2014年度は、国内を中心に都城・官衙遺跡出土の土器や箸の実見調査をおこなった。研究成果の一部については都城出土箸に着目した論文を執筆し、市民講座において「飛鳥時代の土器と東アジア」、「古代宮都と舶来品」と題する講演をおこなった。

◆古代日本の宮都、寺院出土磚の基礎的研究

代表者・中川 二美　若手研究（B）継続

本研究の目的は、磚の生産導入過程をあきらかにし、古代社会の手工業生産体制の一端を解明することである。

2014年度は、宮都のほかに寺院出土の磚の集成もおこなった。集成した磚を所蔵先にて調査し、資料に残された加工等の痕跡から積む、敷く等の使用方法の復原をおこなった。この成果をもとに、寺院の建物基壇の外装に積み上げて使用された磚の分類、および磚積の基壇外装の形態についても考察をおこない論考にまとめた。また、施釉磚の調査もおこない、特に法華寺旧境内出土磚の使用方法について紀要2015にまとめた。

◆大工道具とその加工痕跡から見た建築技術史の研究

代表者・番 光　若手研究（B）新規

本研究は、大工道具の伝世品資料および建築部材に残された加工痕跡から、近世以前の木造建築および部材加工技術の特質についてあきらかにしようとするものである。

2014年度は大工道具の伝世品資料の調査を中心に進めた。近世末の家大工が使用する大工道具一式である竹中大工道具館所蔵西浦家大工道具について全資料109点の実測調査をおこなった。また、近代の資料ではあるが神奈川県立歴史博物館所蔵前場家大工道具についても調査をおこない、近世と近代の家大工が使用する大工道具一式の比較検討をおこなった。

◆重要文化的景観の評価方法と保護手法における現状と課題

代表者・惠谷 浩子　若手研究（B）継続

2014年度は、昨年度に引き続き各調査報告書・保存計画書を入手して情報収集と整理をおこなった。また、長崎市や平戸市、長浜市、四万十市等での現地詳細調査を実施するとともに、重要文化的景観の類型化や、調査と価値評価、評価と保存計画の整合性について検討した。

◆近世庭園の様式と地域性に関する基礎的研究：重森編年への検証として

代表者・高橋 知奈津　若手研究（B）新規

本研究は、安土桃山時代から江戸時代の寺院や邸宅の庭園を対象に、その構成要素や様式的特徴について詳細に整理・分析することにより、先行の様式編年研究を検証することを目的とする。庭園は樹木等の成長や人為的な改修等により、常に変化しながら継承される点で、精細な様式編年が難しく、先行の編年研究への検証がこれまで進められてこなかった。本研究では、現存事例が多く、規模的にも全体が把握しやすい近世のいわゆる「書院造庭園」について、築造年代の絞り込みを可能とする様式編年の構築を目指す。

2014年度は、先行の編年研究とその対象となった事例の整理・分析を進めつつ、一部実地調査をおこなった。

◆古代東北アジアにおける金工品の生産・流通構造にかんする考古学的研究

代表者・諫早 直人　若手研究（B）新規

本研究は５・６世紀を中心に東北アジア各地の金工品について調査をおこない、各地の生産体制を復元するとともに、それらを相互に比較することで古代東アジア世界における金工品の生産と流通の実態をあきらかにすることを目的とする。

初年度は継続して調査をおこなってきた月岡古墳出土品に関する研究成果を査読紙に投稿し、初期金銅製品の生産体制に対して一定の見通しを示すことができた。また日本最古の舎利荘厳具でありながら、その全貌があきらかでない飛鳥寺塔心礎出土品について、本格的な整理に着手した。

◆七世紀土器編年からみた古代宮都の変遷に関する考古学的研究

代表者・若杉 智宏　若手研究（B）新規

本研究は、飛鳥地域出土の土器と難波地域出土の土器の比較から、７世紀半ば以降の宮都の変遷過程を再検討することを目的とする。

研究の第一として、７世紀の実年代観確定のため、飛鳥編年の基準資料である坂田寺池SG100出土土器の全容報告をおこなう。

研究初年度にあたる2014年度は、坂田寺池SG100出土資料の再整理作業（接合、個体識別、実測等）を進めた。また、７世紀代の飛鳥地域および難波地域出土土器の集成作業をおこなった。

◆九州旧石器編年の再構築と集団関係の研究―中九州石器群の再検討

代表者・芝 康次郎　若手研究（B）新規

九州の旧石器時代編年は、その南北で異なる。この違いは、両地域の土層堆積に起因するものだが、これを、両地域の間にある中九州の石器群を詳細に検討することで解消しようとするのが、本研究である。

１年目である本年は、中九州のとくにAT下位の石器群の資料集成をおこない、石器を実見した。また、これらの石器群で利用頻度の高い西北九州黒曜石原産地の踏査を実施した。これらの成果の一部は、九州考古学会等で口頭発表、誌上発表した。また次年度以降に計画している阿蘇外輪山西麓での発掘調査の打ち合わせをおこない、準備を進めた。

◆古代都城造営における造瓦体制の復元的研究

代表者・石田 由紀子　若手研究（B）新規

本研究は、瓦を通して古代都城造営における物資の生産・供給に関するシステムの一端を解明するものである。都城の造瓦を担った瓦窯の基礎データを収集・分析し、それらと都城出土瓦をと比較し生産地を特定することで、より精緻な都城の瓦生産・供給システムの解明を目指す。初年度は、主に中山瓦窯、歌姫西瓦窯等の平城宮所用瓦窯の、製作技法や胎土等に着目し、基礎データを収集した。同じ瓦窯であっても製作技法にはバリエーションがあることが判明しており、都城出土瓦との比較に向けてそれらを把握することに重点を置いた。

◆荘厳化を目的とした建築装飾に関する研究

代表者・大林 潤　若手研究（B）新規

本研究は、寺院建築を中心とした宗教建築における荘厳化を目的とした装飾につい

て建築装飾の技法・年代・地域ごとの体系化をめざし、その建物の使用方法や建築群内での位置づけ等を基準とした荘厳化の内容を解明することを目的とする。2014年度は、奈良県下の文化財建造物の保存修理工事報告書を中心に、装飾に関わる資料を抽出し整理するための準備作業をおこなった。(10月より産休のため中断中)

◆古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究

代表者・山崎 健　若手研究（B）新規

本研究の目的は、遺跡から出土した食料残滓から、古代における食生活をあきらかにすることである。初年度にあたる2014年度は、古代の遺跡から出土した動物遺存体を集成するとともに、事例研究として御食国である若狭国を検討した。若狭の製塩遺跡として著名な浜禰遺跡の動物利用を再検討して、①土器製塩が盛期を迎えるにつれて採貝活動が低調化したこと、②５世紀後葉～６世紀前葉に浜禰遺跡から供給された魚介類の多くは、荷札木簡や延喜式の品目と共通していたこと等を指摘した。こうした成果の一部は、福井県美浜町での講演や「若狭の漁撈と製塩」と題した論文で公表した。

◆中近世における標準年輪曲線の広域ネットワーク整備による木材産地推定

代表者・星野 安治　若手研究（B）新規

本研究では、木材移送が盛んになった中近世を中心とした過去約1000年間について、これまで構築した標準年輪曲線ネットワークを、その空白域である近畿以西の西日本にも拡張する。そして、標準年輪曲線ネットワークの地域区分を日本の全域についてあきらかにし、年輪年代学的手法による木材産地推定を、わが国で応用することを目的とする。

研究初年度である2014年度は、試料探索を中心におこなった。広島、岡山、鳥取等の埋蔵文化財収蔵施設、および建造物修理現場を探索し、本研究に有用と考えられる木材試料を多数、見出すことができた。その内の一部は、高解像年輪画像を撮影し、年輪計測を開始している。

◆近世における石材生産と運搬に関する広領域史的情報の資源化と実証的研究

代表者・高田 祐一　研究活動スタート支援　継続

本研究の目的は、文献史料・考古資料を含めた史的情報を資源化し、有効な活用方法を模索することである。実証的研究として近世における石材生産の実態解明をテーマとしている。

2014年度は、香川県小豆島の「大坂城石垣石切丁場跡」にて採石痕跡の実地調査を実施した。採石痕跡の「矢穴」をシリコンにて型取りし三次元計測を実施した。その結果、作業者によって技術のバラツキがみられること、１つの石材を切出すために複数人で労働集約的に作業を進めていることが判明した。文献史料ではあきらかにできない末端の作業景観を復元できた。

◆東アジア都城出土瓦の考古学的研究

代表・中村 亜希子　特別研究員奨励費継続

2014年度は、東京大学考古学研究室が保管する渤海上京遺跡出土瓦の三次元計測データの分析を主におこなった。2013年度までに計測した300余点の中には同范と認定できる資料が多数存在しており、その范傷の進行程度と出土遺構に関連性があることが判明した。

さらに、瓦をはじめとする渤海三彩陶製品の検討もおこなった。渤海遺跡から出土する三彩陶製品は渤海国産であるか唐からの搬入品であるかという点で議論が続いてきたが、本研究では化学分析結果をふまえて、８世紀半ば以降渤海三彩の内容・産地・出土状況に変化が生じたことをあきらかにした。

学会・研究会等の活動

◆文化財写真技術研究会

2014年７月４～５日に第５回（通算26回）の文化財写真技術研究会の総会と研究集会を奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂において開催した。(参加者延べ161名)プログラムは下記のとおり。

１日目：総会・研究会Ⅰ　改めて学ぶ写真撮影～文化財写真黎明期の撮影と保存～

講演「入江泰吉記念奈良市写真美術館における写真保存の現状」(兼古健悟氏；奈良市写真美術館)

２日目：発表「光ディスクメディアの長期保存対策について」(酒井健男氏；(株)アルメディオ)、報告「埋蔵文化財写真撮影の標準仕様について」(栗山ほか)

研究会Ⅱ　改めて学ぶ写真撮影～ライティングからRAW現像処理～

発表「デジタル撮影におけるライティングの基礎」(玉内公一氏；テクニカルアドバイザー)、発表「RAW現像データの現像調整処理の実際」(会員有志)

今回はデジタルシフトが進む文化財写真について、「改めて学ぶ写真撮影」をテーマに研究集会を開催するとともに、会誌『文化財写真研究』VOL.5を刊行した。研究集会では、撮影技術の根幹にあたるライティングや写真画像の高品質化に欠かせないRAW現像処理の実演発表をおこない、デジタル撮影技術に対する理解を深めた。

（栗山 雅夫）

◆日本遺跡学会

2014年11月29・30日に、東京の品川区立品川歴史館において、2014年度総会および大会を開催した。今回の大会では、「遺跡は何を伝えられるか　―貝塚からの情報―」をテーマとした。

初日は、田辺征夫学会長および西田健彦大会実行委員長の開会挨拶の後、禰冝田佳男氏（文化庁記念物課埋蔵文化財部門主任文化財調査官）の基調講演１「震災復興と埋蔵文化財調査―発掘調査と地域づくり・ひとづくり」および岡村道雄氏（奥松島縄文村歴史資料館名誉館長）の基調講演２「貝塚から学ぶ現代生活―貝塚の重要性―」のほか、菅原弘樹氏（奥松島縄文村資料館）「貝塚に残された災害の痕跡―里浜貝塚と室浜貝塚の調査―」、村田六郎太氏（元・千葉市立加曽利貝塚博物館）「史跡加曽利貝塚」の２つの事例報告があった。

２日目は、大森貝塚遺跡庭園の現地見学の後、中野光将氏（品川区立品川歴史館）「大森貝塚」、中島広顕氏（北区飛鳥山博物館）「中里貝塚」の２つの事例報告を受け、禰冝田氏の進行の下に「現代生活と貝塚」を主題とした討論をおこなった。

刊行事業としては、日本遺跡学会設立10周年記念事業の一環として『遺跡学の宇宙―戦後黎明期を築いた十三人の記録』を出版したほか、学会誌『遺跡学研究』第11号（特集１：北方の文化と遺跡、特集２：遺跡とデザイン）を発行した。

（前川 歩）

◆木簡学会研究集会

2014年12月６・７日、第36木簡学会総会・研究集会を、平城宮跡資料館講堂・小講堂において開催した（参加者150名）。

６日は、高妻洋成氏「木簡など有機遺物の保存環境」で過去と未来の木簡保存に関する最新研究成果を学び、山本崇氏「2014年全国出土の木簡」で全国出土木簡を概観し、加賀見省一氏・前岡孝彰氏（但馬国府・国分寺館）「但馬国分寺跡第５次調査と出土木簡」で77年出土の同木簡に関する最新研究成果をご報告いただいた。

７日は、石神裕之氏（京都造形芸術大学）「江戸・東京の木簡データベース構築に向けた課題―出土木製品の種類・形態・

材質を通して―」と鐘江宏之氏「江戸・東京の木簡研究の現状と課題」で近世・近代木簡研究を展望し、小檜山一良氏（（公財）京都市埋蔵文化財研究所）「平安京跡左京九条三坊十町（施薬院跡）の発掘調査と出土木簡」で最新の出土情報をご紹介いただいた。

なお、会誌『木簡研究』第36号を編集・刊行した（編集担当：渡辺晃宏）。

（渡辺 晃宏）

◆条里制・古代都市研究会

第31回条里制・古代都市研究会大会は、2015年３月７・８日に平城宮跡資料館講堂で開催された。今回は、「条里地割の形成」をテーマとし、７日は京嶋覚「長原遺跡の水田遺構からみた丹比郡北部の条里地割」、鈴木悦之「曲金北遺跡と静清平野の条里地割」、服部一隆「班田収授法と条里地割の形成」、木本雅康「歴史地理学からみた西海道北部における条里地割の形成―古代官道との関係を主にして―」の各発表後、活発な質疑・討論が交わされた。８日は、調査レポートとして鈴木智大・神野恵・小田裕樹「平城宮佐伯門前の発掘調査―一条南大路関連遺構とその造営における土木技術―」、南孝雄・丸山真史「平安京左京四条一坊四町跡の調査―藤原為隆の坊城堂跡―」、柏田有香「平安京北郊・京都市植物園北遺跡の古代の様相」、信里芳紀「讃岐国府跡の発掘調査」、菅波正人「福岡市鴻臚館跡の調査」の各報告後、質疑応答があった。いずれも最新の調査成果や研究成果を反映させた報告で、大変有意義な大会となった。

（青木 敬）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備

2013年度に引きつづき、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門的見地からの助言をおこなった。

平城宮跡内では、国土交通省が計画した第一次大極殿院復原建物の木材保管等をおこなう工事ヤード造成にともなう事前の発掘調査をおこなった（第542次；『奈文研紀要2015』参照）。場所は遺構展示館の北東方である。そのほか第一次大極殿院回廊の基壇復原整備工事、復原事業情報館建設等、平城宮跡内における整備工事にともなう立会調査に対応した。

一方、文化庁が計画した平城宮跡内における高圧埋設配電の改修、および東院庭園池水濾過設備の改修工事にともなう立会調査に対応した。

2010年度から進めている第一次大極殿院の復原における大きな課題の一つに、鴟尾の問題があった。とりわけ回廊隅に想定できる双頭の鴟尾について、そもそも鴟尾を用いるのかどうか、という点を含め、所外の有識者を招いて３度の検討会を開催した。回廊隅の鴟尾は山田寺で双頭単尾の鴟尾の出土例があったが、年中行事絵巻には平安宮の回廊に双頭双尾の鴟尾が描かれており、鴟尾を用いるのであれば、どういった形態にするかも議論を重ねた。その過程で回廊隅の鴟尾について五分の一の模型をいくつか製作し、検討を重ねた結果、双頭双尾の鴟尾を用いることとした。詳細は『奈文研紀要2015』を参照されたい。

このほか、所内の大極殿院復原検討会を３回開催し、細部の検討を重ねた。これらの検討成果を文化庁が開催する復原検討委員会に2014年度は２回諮り、ほぼ認められた。

復原案がほぼ固まったことを受けて、国土交通省・文化庁とともに、「平城宮跡第一次大極殿院の復原整備」と題した特別講演会を、2015年２月８日に開催した。ここでは、全３題の講演のうち、奈文研職員は、小野健吉「平城宮跡の整備と第一次大極殿」、箱崎和久「奈良時代の第一次大極殿院の姿」を発表した。

（箱崎 和久）

第一次大極殿院瓦検討会
（2014年5月16日開催）

●高松塚古墳壁画の保存修復のための材料調査

高松塚古墳壁画は、国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、現在、クリーニング等の作業が実施されている。壁画の保存修復においては、石材、漆喰および彩色材料等に対する調査をおこない、その材料、劣化状態および劣化原因に関する情報を得ることが重要である。

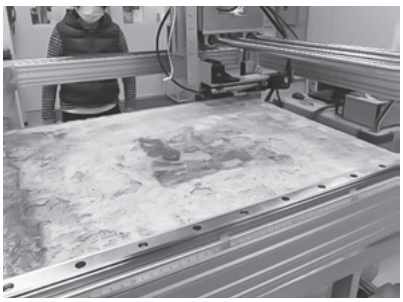
2014年度は、劣化原因調査および修復のための継続的な材料調査として、可視分光分析による東壁男子群像ならびに西壁男子群像の色料の調査をおこなった。その結果、東壁男子像の４人の唇からは、全て水銀朱（鉱物名：辰砂）の特徴を持つ可視反射スペクトルが得られた。なお、この結果は過去におこなった蛍光Ｘ線分析で水銀が検出されていることとも整合している。

また、漆喰の状態を調査するため、東壁１および東壁３に対してテラヘルツ波イメージングをおこなった。その結果、漆喰が渦紋状を呈している部分については、テラヘルツ波の反射信号が大きいことから、非常に硬くなっている部分が存在していることがあきらかとなった。THz-TDS法により漆喰が浮いている部分を平面的に検出することができた。

経年変化の記録撮影として、東壁３石、西壁３石、天井石４石ならびに北壁に対して可視光と赤外光によるデジタルアーカイブスキャニングを実施し、800dpiの高精細画像を取得した。新たに開発した紫外光によるスキャニング技術を用いて、文化財資料への試験スキャニングを実施し、安全性および解像度の検証をおこない、得られた画像の有用性を確認することができた。今後は、古墳壁画の調査において、紫外線スキャニングの実現に向けて大きく前進したものということができよう。

また、古墳壁画に用いられている色料の分析精度を上げるため、壁画専用のＸ線回折装置の開発に着手した。

（高妻 洋成）



高松塚古墳壁画の材料調査

●キトラ古墳に関する調査研究

キトラ古墳関係の事業では、墳丘整備の調査と、保存科学調査を実施した。

墳丘整備においては、2014年４～７月に実施されたキトラ古墳仮設保護覆屋の解体作業に際し、立会調査をおこなった。立会調査では、遺構へ影響がおよばないよう作業内容に注意を払い、必要に応じ、作業方法の変更等を指示した。2014年７月末、解体工事は遺構に損傷等を与えることなく、無事終了した。

2014年７月の仮設保護覆屋の解体作業終了を受け、2014年８月に墳丘下方（南側）部分を中心に３次元レーザー測量を実施した。これにより、墳丘整備前の形状や地形の精密なデジタルデータを得ることができた。

また、2014年12月に実施されたキトラ

古墳南～西部斜面の竹林等伐採・抜根作業において、立会調査をおこなった。作業地には顕著な遺構は存在せず、作業は無事終了した。

2014年12月の墳丘南～西部斜面の竹林等伐採作業の終了を受け、2014年12月末に斜面部の３次元レーザー測量を実施した。これにより、墳丘整備前の周辺地形につき、精密なデジタルデータを得ることができた。

保存科学調査では、2004年度の発掘調査により出土した遺物のうち、特に報告書未掲載の骨小破片について約８箱分のクリーニング、樹脂による仮強化処置、仮保管ケースの作成をおこなった。また出土遺物の点検作業および収蔵庫の温湿度モニタリング、調湿剤等の交換作業を継続しておこなっている。

さらに、墓道部の埋戻し前に実施した版築層の土層転写資料から、各層の土壌資料を採取し、粒度分布調査をおこなうとともに、土層転写資料のパネル作成をおこない、縦置き展示時には東西面と南北面が垂直に展示できるようにした。（玉田 芳英）

キトラ古墳墳丘整備にむけた覆屋の解体

発掘調査現地説明会・見学会

◆平成26年11月8日（土）

飛鳥藤原第182次（藤原宮大極殿院）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
主任研究員　森川 実
参加者794人　　調査面積1,450㎡

◆平成26年12月14日（日）

飛鳥藤原第183次（藤原宮東方官衙）
発掘調査現地見学会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
研究員　森先 一貴
参加者622人　　調査面積973㎡

◆平成27年2月28日（土）

国宝・薬師寺東塔保存修理事業にともなう発掘調査現場見学会（奈良県立橿原考古学研究所と合同）
都城発掘調査部（平城地区）
主任研究員　青木 敬
参加者1,599人　　調査面積314.16㎡

飛鳥藤原第182次　現地説明会

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上をはかるため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2014年度は、専門研修15課程を実施した（2014年度文化財担当者研修課程の一覧参照）。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数82日、研修生総数171名であった。

各部・センターでは、要請に従って地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2014年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、地方公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の探査、動物依存体分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野の客員教員として玉田芳英（歴史考古学）、小野健吉（庭園史学、文化的景観学）、馬場基（史料学）、山崎健（環境考古学）、高妻洋成（保存科学）の５名がそれぞれの講義、演習および実習をおこなうとともに、文化遺産学分野を専攻する院生に対して必要に応じて奈良文化財研究所において研究指導をおこなった。

2014年度には、修士課程1名、博士後期課程4名に加え、京都大学大学院総合生存学館（思修館）総合生存学専修博士一貫課程の2年次学生を研究生として受け入れ、研究指導をおこなった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教授として、杉山洋（歴史考古学特論）・小池伸彦（文化財学の諸問題）・渡辺晃宏（歴史資料論）が担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなった。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡等の遺跡や、そこから出土した坩堝や羽口、金属製品、木簡をはじめとする遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈良文化財研究所ならではの特色ある教育を実践した。

奈良大学への教育協力

昨年度に引き続き「文化財修景学」（担当：文化遺産部遺跡整備研究室）に出講した。遺跡等の保護と整備に関する制度・歴史・理念・手法等について、体系的に講義をおこなった。

2014年度　日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧（委員の委嘱を受けているもの）

（青森）	三内丸山遺跡　縄文遺跡群
（岩手）	御所野遺跡　志波城跡
（宮城）	多賀城跡
（福島）	宮畑遺跡　宮脇廃寺跡
（茨城）	水戸市史跡
（群馬）	上野国分寺跡　金井東裏遺跡　上野国佐位郡正倉跡
（新潟）	吹上・釜蓋遺跡
（石川）	金沢城　旧松波城庭園　真脇遺跡
（岐阜）	正家廃寺跡　大萱古窯跡群　郡上市伝統的建造物群
（静岡）	新居関跡　遠江国分寺跡
（愛知）	東之宮古墳　名古屋城跡　島原藩主深溝松平家墓所
（三重）	伊勢国分寺跡　斎宮跡　長谷川家
（滋賀）	敏満寺石仏谷墓跡　日吉神社境内　紫香楽宮跡　胡宮神社社務所庭園
（京都）	城陽市史跡　元離宮二条城　宇治川太閤堤跡
（大阪）	百済寺跡　新堂廃寺等　鳥坂寺跡　旧西尾家住宅　観心寺境内　和泉黄金塚古墳　日根野荘遺跡
（兵庫）	赤穂城跡　五斗長垣内遺跡　竹田城跡　加茂遺跡
（奈良）	旧大乗院庭園　平城京左京三条二坊宮跡庭園　中宮寺跡　巣山古墳　大安寺旧境内　唐古・鍵遺跡　五條市伝統的建造物群　菖蒲池古墳　東大寺境内　春日大社境内　薬師寺東塔　香芝市史跡　鳥の山古墳　橿原市伝統的建造物群　宇陀市松山地区伝統的建造物群　纒向遺跡
（和歌山）	紀伊山地の霊場と参詣道
（鳥取）	浦富海岸　青谷上寺地遺跡
（島根）	旧堀氏庭園　出雲大社境内遺跡　津和野町伝統的建造物群　三瓶小豆原埋没林　大田市伝統的建造物群
（岡山）	第二次山陽遺跡　備中松山城跡
（広島）	二子塚古墳
（山口）	宮市本陣兄部家　長州藩下関前田台場跡
（徳島）	勝端城館跡　讃岐国府跡
（香川）	屋嶋城跡　快天山古墳　丸亀城跡　讃岐国府跡
（愛媛）	永納山城跡
（福岡）	大宰府史跡　鴻臚館跡　三雲・井原遺跡
（佐賀）	肥前陶器窯跡
（長崎）	鷹島海底遺跡
（熊本）	西南戦争遺跡　堅志田城跡
（大分）	大分元町石仏　ガランドヤ古墳　長者屋敷官衙遺跡
（宮崎）	日向国府跡　蓮ケ池横穴群

2014年度　文化財担当者研修課程一覧

区分	課　　程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修日数	応募者数	受講者数
専門研修	建築遺構調査課程	6月9日～6月13日	12名	地域の中核となる地方公共団体の文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	発掘調査で検出される建築遺構や出土建築部材に関して必要な、上部構造の専門的知識や発掘方法等についての研修遺跡・遺構の探査に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺構研究室	5 日	9名	9名
	植物遺体調査課程	6月16日～6月20日	10名	〃	木材、種実、花粉、プラント・オパール等の植物遺体を発掘調査現場で扱うための専門的知識と調査方法の取得を目的とした研修	環境考古学研究室	5 日	10名	10名
	庭園・自然名勝等保存活用基礎課程	6月23日～6月27日	10名	〃	歴史的庭園の保護をはじめとして、名勝の調査および保存管理・修理等について、基本的な考え方から実務に至る基礎知識を習得することを目的とする研修	遺跡整備研究室	5 日	19名	19名
	報告書作成Ⅰ（編集基礎）課程	7月7日～7月11日	20名	〃	文化財調査に必要不可欠な報告書等の学術出版物制作にあたって、編集に必要な基礎知識と印刷工程の基礎知識についての研修	企画調整室	5 日	16名	15名
	報告書作成Ⅱ（応用制作）課程	7月14日～7月18日	20名	〃	報告書等の出版物制作にあたり、実際の編集作業に必要な知識や技術、特にデジタル編集の実習を通じて制作のノウハウを学べる研修	企画調整室	5 日	9名	9名
	自然科学的年代測定法課程	9月1日～9月5日	10名	〃	文化財調査に年輪年代測定や放射性炭素年代測定等自然科学的年代測定を積極的に取り入れるための基礎知識や留意点の習得を目指す研修	年代学研究室	5 日	5名	5名
	文化的景観調査計画課程	9月8日～9月12日	10名	〃	文化的景観の保護にこれから取り組む担当者を対象に、文化的景観の歴史・概念、保護制度、調査手法および保存計画立案等についての基礎知識を習得することを目的とする研修	景観研究室	5 日	12名	12名
	遺跡測量課程	9月29日～10月3日	8名	〃	『発掘調査のてびき』（文化庁）に準拠した遺跡の測量および外注に必要な専門的知識と技術の研修	遺跡・調査技術研究室	5 日	11名	10名
	保存科学基礎Ⅰ（金属製遺物）課程	10月7日～10月16日	10名	〃	金属製遺物の材質および劣化状態に応じた保存処理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができるよう、金属製遺物の材質、劣化状態および保存処理に関する基礎知識を習得することを目的とする。	保存修復科学研究室	10 日	9名	9名
	保存科学基礎Ⅱ（木製遺物）課程	10月16日～10月24日	10名	〃	木製遺物の樹種、木取りおよび劣化状態に応じた保存処理法の策定、仕様書の作成をおこなうことができるよう、木製遺物の劣化状態および保存処理に関する基礎知識を習得することを目的とする。	保存修復科学研究室	9 日	6名	6名
	古文書歴史資料調査基礎課程	12月8日～12月12日	10名	〃	古文書・歴史資料の調査・管理等を担当する立場にあるが、当該分野に関する専門的教育を受けたことのない地方公共団体等の文化財担当者を対象に、基礎的知識の習得を目指す研修	歴史研究室	5 日	18名	18名
	遺跡情報記録調査課程	12月16日～12月19日	20名	〃	遺跡・遺物の正確な記録とその保存活用手法として、GISやデータベースの利用、遺跡情報の公開に関する知識の取得を目指す研修	文化財情報研究室	4 日	18名	18名
	文化財写真課程	1月13日～1月23日	15名	〃	文化財の記録についての中核をなす記録写真撮影について、様々な文化財分野の写真についての基礎知識と実習による実技を習得できる研修	写真室	11 日	13名	13名
	出土文字資料調査課程	1月26日～1月30日	15名	〃	木簡・墨書土器・漆紙文書等、出土文字資料の調査のための実践的な技術や知識の取得を目的とする研修	史料研究室	5 日	6名	6名
	保存科学Ⅲ（応急処置）課程	2月16日～2月20日	10名	〃	発掘調査において出土した脆弱遺物の取り上げ、保存処理までの一時保管法等の遺物の取り扱いに関する応急処置について、講義と実習を通して習得することを目的とする。	保存修復科学研究室	5 日	12名	12名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「いにしえの匠たち―ものづくりからみた飛鳥時代―」

2014年4月25日～6月15日

飛鳥時代の様々な手工業生産技術に焦点をあて、古代の匠と再現品を作成した現代の匠を対比させた。来館者数10,597人。脇田宗孝氏、小泉武寛氏と、当研究所の松村恵司、玉田芳英の４名による記念座談会「いにしえの技術を語る―現代の「匠」と考古学者―」を５月11日に実施した（参加者51人）。ギャラリートークを３回実施。図録第60冊『いにしえの匠たち―ものづくりからみた飛鳥時代―』を刊行した。

◆夏期企画展「第５回写真コンテスト「飛鳥の甍」応募作品展」

2014年7月25日～9月7日

「飛鳥の甍」をテーマに募集した作品を展示し、優秀作品を選出した。来館者数3,505人。応募・陳列件数213点。写真教室「①写真のパソコン仕上げ術」「②デジタルプリントテクニック」を開催した（参加者計25人）。甍のある民家を紹介したリーフレット『飛鳥の甍マップ』を作成、配布した。

◆企画展「津田洋　大和の美仏に魅せられて」

2014年9月12日～9月28日

イラストレーター津田洋氏による大和の仏像画を展示した。来館者数2,716人。陳列件数20点。カタログ第31冊『大和の美仏に魅せられて』を刊行した。

◆秋期特別展「はぎとり・きりとり・かたどり―大地にきざまれた記憶―」

2014年10月10日～11月30日

当研究所の埋蔵文化財センター設立40周年を記念し、遺構を現地以外で保存・公開が可能な資料化する技術に焦点をあて、土層や遺構の剥ぎ取り（土層転写）、切り取りによる実物資料、型取りによるレプリカ等を紹介した。来館数者9,592人。記念講演会として澤田正昭氏「もうひとつの遺跡保存―土層転写と遺構切り取り―」を11月１日に開催した（参加者40人）。ギャラリートークを４回実施。鑑賞の手引き「みるヒント」を作成、配布した。図録第61冊『はぎとり・きりとり・かたどり―大地にきざまれた記憶―』を刊行した。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2014―縄文・弥生・古墳から飛鳥へ―」

2015年1月16日～3月1日

奈良県立橿原考古学研究所、明日香村と共催。飛鳥時代のイメージが強い飛鳥にも縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺跡が多数あることに焦点をあてるとともに、2013年度の飛鳥地域の発掘調査成果を展示した。来館者数2,658人。ギャラリートークを４回実施。カタログ第32冊『飛鳥の考古学2014』を刊行した。

このほか、常設展示の一部として以下をおこなった。高松塚古墳・キトラ古墳の壁画を拡大して鑑賞できる「壁画ナビゲーション」システムを設置した。高松塚古墳壁画の高精細漆喰印刷、高松塚古墳のつき棒痕跡が残る版築切り取り、向原寺所蔵金銅観音菩薩立像を展示した。また明日香村活性化事業「飛鳥光の回廊」に参加し、夜間無料開館を実施した（９月13・14日夜間来館者計482人）。

平城宮跡資料館の展示

◆夏期企画展「平城京ビックリはくらんかい―奈良の都のナンバーワン―」

2014年7月12日（土）～9月21日（日）

平城宮や平城京の発掘調査で出土した様々な発見の中から、一番大きいもの、一番小さいもの、一番多いもの、一番少ないもの等、一番ビックリ！する出土品を集めた展示。夏休み期間中の親子連れを意識して、体験コーナーも取り入れた親しみやすい展示構成とした。会期中の入館者数は17,712名で、ギャラリートーク「ビックリ先生のじまん話」を５回（参加者計145名）、親子ワークショップを１回（参加者35名）おこなった。

平城宮跡資料館：「ビックリ先生のじまん話」の様子

◆「地下の正倉院展―木簡を科学する」／「埋蔵文化財センターの40年」

2014年 10月18日（土）～11月30日（日）

年に一度の木簡実物の展示公開。2014年度は「木簡を科学する」をテーマとし、木簡の樹種や木取り、保存処理の方法、木製品や考古遺物としての特質等に

焦点をあて、木簡研究の最新成果を紹介した。会期中３回、都城発掘調査部史料研究室の研究員によるギャラリートークをおこなった（参加者計124名）。また、同じ会場で、埋蔵文化財センター設立40周年を記念して、当センターのこれまでの歩みや各研究室の最新の研究成果等を紹介するパネル展を同時開催した。会期中の入館者数は19,281名であった。

◆平城宮跡資料館ミニ展示「発掘速報展　平城2014」

第１期…2014年12月６日（土）～２月１日（日）
第２期…2015年２月14日（土）～３月31日（火）

2013年度の平城宮・京における発掘成果をいち早く伝えるミニ展示。第１期は平城宮東院地区、西大寺旧境内、第２期は興福寺西室、薬師寺十字廊について、出土遺物や写真パネルで紹介した。会期中の入館者数は19,974名であった。

2014年度　入館者数

飛鳥資料館（有料）観覧料の詳細は63頁	平城宮跡資料館（無料）	合　　計
38,096人	109,188人	147,284人

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

2015年３月31日現在、所定の研修を受けた解説ボランティアの登録数は139名を数え、平均して一人当たり１ヶ月に２～３日のガイド活動をおこなっている。

2014年度における活動については、定点５ヵ所の解説を中心に、予約受付した来場者への宮跡内ツアーガイドを充実させた。

奈良文化財研究所としては、平城宮跡を広く一般に理解しもらうために、その案内・解説を「平城宮跡解説ボランティア」を通じておこない、その連続する活動を可能にするために、研修機会等の提供等積極的な支援をおこなった。

また、ボランティアガイドの活動をさらに広報し、より多くの方に平城宮跡へお越し頂くようチラシ、機関誌も発行した。

2014年「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数　308日間）

各定点において解説を受けた来訪者のべ人数							解説をした平城宮跡解説ボランティアの延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	ツアーガイド	計	
21,448人	22,993人	8,274人	18,415人	7,477人	5,166人	83,773人	3,915人

＊活動は、定点施設の休館日を除く毎日。

2015.3.31現在

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の書籍および写真資料を収集している。また、仮庁舎図書資料室においても一般公開施設として位置づけて公開しており、所外の研究者および一般の方々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写のサービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスを実施している。

また、奈文研の刊行物についても、PDF化をおこない、インターネットを通じて公開している。

公開データベース一覧	2014年度アクセス件数
木簡データベース	220,483
木簡画像データベース［木簡字典］	31,451
木簡画像データベース［木簡字典］〈韓国語版〉	452
木簡画像データベース［木簡字典］〈中国語版〉	1,419
木簡画像データベース［木簡字典］〈英語版〉	869
木簡字典・電子くずし字字典連携検索	143,093
墨書土器字典	1,732
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	603
軒瓦データベース	534
遺跡データベース	6,186
古代地方官衙関係遺跡データベース	1,656
古代寺院遺跡データベース	2,533
官衙関係遺跡整備データベース	378
遺跡の斜面保護データベース	1,411
発掘庭園データベース	931
Archaeologically Excavated Japanese Gardens	465
所蔵図書データベース	27,427
報告書抄録データベース	4,389
考古関連雑誌論文情報補完データベース	1,156
薬師寺典籍文書データベース	781
大宮家文書データベース	269
平城京出土陶硯データベース	443
学術情報リポジトリ	39,379

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所　学報

第１冊　仏師運慶の研究（1954）
第２冊　修学院離宮の復元的研究（1954）
第３冊　文化史論叢（1954）
第４冊　奈良時代僧房の研究（1957）
第５冊　飛鳥寺発掘調査報告（1958）
第６冊　中世庭園文化史（1959）
第７冊　興福寺食堂発掘調査報告（1959）
第８冊　文化史論叢Ⅰ（1960）
第９冊　川原寺発掘調査報告（1960）
第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告（1961）
第11冊　院の御所と御堂―院家建築の研究―（1962）
第12冊　巧匠安阿弥陀仏快慶（1962）
第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察（1962）
第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究（1962）
第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査（1962）
第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査（1963）
第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査（1966）
第18冊　小堀遠州の作事（1966）
第19冊　藤原氏の氏家とその院家（1968）
第20冊　名物烈の成立（1970）
第21冊　研究論集Ⅰ（1972）
第22冊　研究論集Ⅱ（1974）
第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査（1975）
第24冊　高山―町並調査報告―（1975）
第25冊　平城京左京三条二坊（1975）
第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ　内裏北外郭の調査（1976）
第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ（1976）
第28冊　研究論集Ⅲ（1976）
第29冊　木曽奈良井―町並調査報告―（1976）
第30冊　五條―町並調査の記録―（1977）
第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ（1978）
第32冊　研究論集Ⅳ（1978）
第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告（1978）
第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ　宮城門・大垣の調査（1978）
第35冊　研究論集Ⅴ（1979）
第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ（1979）
第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ（1980）
第38冊　研究論集Ⅵ（1980）
第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ　古墳時代Ⅰ（1981）
第40冊　平城宮発掘調査報告Ⅺ　第一次大極殿地域の調査（1982）
第41冊　研究論集Ⅶ（1984）
第42冊　平城宮発掘調査報告Ⅻ　馬寮地域の調査（1985）
第43冊　日本における近世民家（農家）の系統的発展（1985）
第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告（1986）
第45冊　薬師寺発掘調査報告（1987）
第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書（1989）
第47冊　研究論集Ⅷ（1989）
第48冊　年輪に歴史を読む　―日本における古年輪学の成立―（1990）
第49冊　研究論集Ⅸ（1991）
第50冊　平城宮発掘調査報告書XIII　内裏の調査Ⅱ（1991）
第51冊　平城宮発掘調査報告書XIV　平城宮第二次大極殿院の調査（1993）
第52冊　西隆寺発掘調査報告書（1993）
第53冊　平城宮朱雀門の復原的研究（1994）
第54冊　平城京左京二条二坊・三条二坊　―長屋王邸・藤原麻呂邸―発掘調査報告（1995）
第55冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ　―飛鳥水落遺跡の調査―（1995）
第56冊　平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告（1997）
第57冊　日本の信仰遺跡（1999）
第58冊　研究論集Ⅹ（1999）
第59冊　中世瓦の研究（2000）
第60冊　研究論集Ⅺ（1999）
第61冊　研究論集Ⅻ（2001）
第62冊　史跡頭塔発掘調査報告（2001）
第63冊　山田寺発掘調査報告　本文編　図版編（2002）
第64冊　研究論集XIII（2002）
第65冊　文化財論叢Ⅲ　奈良文化財研究所　創立五十周年記念論文集（2002）

第66冊　研究論集XIV（2003）
第67冊　平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編［法華寺南遺跡］（2003）
第68冊　吉備池廃寺発掘調査報告
百済大寺跡の調査（2003）
第69冊　平城宮発掘調査報告XV
東院庭園地区の調査（2003）
第70冊　平城宮発掘調査報告XVI
兵部省地区の調査（2005）
第71冊　飛鳥池遺跡発掘調査報告Ⅰ（2004）
第72冊　奈良山発掘調査報告Ⅰ
石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査（2005）
第73冊　タニ窯跡A6号窯跡発掘調査報告書（2005）
第74冊　古代庭園研究Ⅰ（2006）
第75冊　研究論集XV（2006）
第76冊　法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告（2007）
第77冊　日韓文化財論集Ⅰ（2008）
第78冊　近世瓦の研究（2008）
第79冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅰ
基壇・礎石（2009）
第80冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅳ
瓦・屋根（2009）
第81冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅱ
木部（2010）
第82冊　平城宮第一次大極殿の復原に関する研究Ⅲ
彩色・金具（2010）
第83冊　研究論集16（2010）
第84冊　平城宮発掘調査報告XVII
第一次大極殿院地区の調査２　本文編/図版編（2011）
第85冊　漢長安城桂宮　報告編・論考編（2011）
第86冊　研究論集17
平安時代庭園の研究―古代庭園研究Ⅱ―（2011）
第87冊　日韓文化財論集Ⅱ（2011）
第88冊　西トップ遺跡調査報告
―アンコール文化遺産保護共同研究報告書―（2011）
第89冊　四万十川流域　文化的景観研究（2011）
第90冊　Western Prasat Top Site Survey Report on Joint Research for the Protection of the Angkor Historic Site（2012）
第91冊　遼寧省朝暘地区隋唐墓の整理と研究（2012）
第92冊　文化財論叢Ⅳ　奈良文化財研究所　創立六十周年記念論文集（2012）
第93冊　奈良山発掘調査報告Ⅱ―歌姫西須恵器窯の調査―（2014）

奈良文化財研究所　史料

第１冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）（1955）
第２冊　西大寺叡尊伝記集成（1956）
第３冊　仁和寺史料 寺誌編Ⅰ（1964）
第４冊　俊乗坊重源伝記集成（1955）
第５冊　平城宮木簡一　図版（1966）
解説（1969）
（平城宮跡発掘調査報告Ⅴ）
第６冊　仁和寺史料　寺誌編２（1968）
第７冊　唐招提寺史料Ⅰ（1971）
第８冊　平城宮木簡二 図版（1975）解説（1975）
（平城宮跡発掘調査報告Ⅷ）
第９冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ（1975）
第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ（1976）
第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ（1977）
第12冊　藤原宮木簡一　図版・解説（1978）
第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ（1978）
第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ（1979）
第15冊　東大寺文書目録第１巻（1979）
第16冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ（1979）
第17冊　平城宮木簡三（1981）
第18冊　藤原宮木簡二（1981）
第19冊　東大寺文書目録第２巻（1981）
第20冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ（1980）
第21冊　東大寺文書目録第１巻（1981）
第22冊　七大寺巡礼私記（1982）
第23冊　東大寺文書目録第４巻（1982）
第24冊　東大寺文書目録第５巻（1983）
第25冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅰ（1983）
第26冊　東大寺文書目録第６巻（1984）
第27冊　木器集成図録―近畿古代編―（1985）
第28冊　平城宮木簡四（1986）
第29冊　興福寺典籍文書目録第１巻（1986）
第30冊　山内清男考古資料１（1988）
第31冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅱ（1988）
第32冊　山内清男考古資料２（1989）
第33冊　山内清男考古資料３（1992）
第34冊　山内清男考古資料４（1992）
第35冊　山内清男考古資料５（1992）
第36冊　木器集成図録―近畿原始編―（1993）
第37冊　梵鐘実測図集成（上）（1993）
第38冊　梵鐘実測図集成（下）（1993）
第39冊　山内清男考古資料６（1993）
第40冊　山田寺出土建築部材集成（1995）

第41冊　平城京木簡一（1995）
第42冊　平城宮木簡五（1996）
第43冊　山内清男考古資料７（1996）
第44冊　興福寺典籍文書目録第２巻（1996）
第45冊　北浦定政関係資料（1997）
第46冊　山内清男考古資料８（1997）
第47冊　北魏洛陽永寧寺（1998）
第48冊　発掘庭園資料（1998）
第49冊　山内清男考古資料９（1998）
第50冊　山内清男考古資料10（1999）
第51冊　山内清男考古資料11（2000）
第52冊　地域文化財の保存修復　考え方と方法（2000）
第53冊　平城京木簡二　長屋王家木簡二（2001）
第54冊　山内清男考古資料12（2000）
第55冊　法隆寺古絵図集（2001）
第56冊　法隆寺考古資料（2002）
第57冊　日中古代都城図録（2002）
第58冊　山内清男考古資料13（2002）
第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ（2003）
第60冊　平城京条坊総合地図（2003）
第61冊　鞏義黄冶唐三彩（2003）
第62冊　北浦定政関係資料
　　松の落ち葉一（2003）
第63冊　平城宮木簡六（2004）
第64冊　平城京出土古代官銭集成Ⅰ（2004）
第65冊　北浦定政関係資料
　　松の落ち葉二（2004）
第66冊　山内清男考古資料14（2004）
第67冊　興福寺典籍文書目録第３巻（2004）
第68冊　古代東アジアの金属製容器Ⅰ中国編（2004）
第69冊　平城京漆紙文書（一）（2004）
第70冊　山内清男考古資料15（2005）
第71冊　古代東アジアの金属製容器２　朝鮮・日本編（2005）
第72冊　畿内産土師器集成西日本編（2005）
第73冊　黄冶唐三彩窯の考古新発見（2006）
第74冊　山内清男考古資料16（2006）
第75冊　平城京木簡三　二条大路木簡１（2006）
第76冊　評制下荷札木簡集成（2006）
第77冊　平城京出土陶硯集成Ⅰ（2006）
第78冊　黒草紙・新黒双紙（2007）
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　図版・解説（2007）
第80冊　平城京出土陶硯集成二 平城京・寺院（2007）
第81冊　高松塚古墳壁画フォトマップ資料（2009）
第82冊　飛鳥藤原京木簡二 図版・解説（2009）
第83冊　興福寺典籍文書目録（2009）
第84冊　山内清男考古資料17（2009）
第85冊　平城宮木簡七　図版・解説（2010）
第86冊　キトラ古墳壁画フォトマップ資料（2011）
第87冊　明治時代平城宮跡保存運動史料集（2011）
第88冊　藤原宮木簡三　図版・解説（2012）
第89冊　仁和寺史料　古文書編一（2013）
第90冊　大宮家文書調査報告書（2014）

奈良文化財研究所　研究報告

第１冊　文化的景観研究集会（第１回）報告書（2009）
第２冊　河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概要（2010）
第３冊　古代東アジアの造瓦技術（2010）
第４冊　古代官衙・集落研究会報告書「官衙と門」報告編／資料編（2010）
第５冊　文化的景観研究集会（第２回）報告書（2010）
第６冊　古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と鉄」（2011）
第７冊　文化的景観研究集会（第３回）報告書（2011）
第８冊　鞏義白河窯の考古新発見（2011）
第９冊　古代官衙・集落研究会報告書「四面廂建物を考える」報告編／資料編（2012）
第10冊　文化的景観研究集会（第４回）報告書（2012）
第11冊　河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査（2012）
第12冊　奈良文化財研究所研究報告書「塩の生産・流通と官衙・集落」（2013）
第13冊　文化的景観研究集会（第5回）報告書（2013）
第14冊　古代官衙・集落研究会研究報告書「長舎と官衙の建物配置」報告編／資料編（2014）

奈良文化財研究所　基準資料

第１冊　瓦編１　解説（1974）
第２冊　瓦編２　解説（1975）
第３冊　瓦編３　解説（1976）
第４冊　瓦編４　解説（1977）
第５冊　瓦編５　解説（1977）
第６冊　瓦編６　解説（1979）
第７冊　瓦編７　解説（1980）
第８冊　瓦編８　解説（1981）
第９冊　瓦編９　解説（1984）

飛鳥資料館　図録

第１冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏（1976）
第２冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文編（1977）
第３冊　日本古代の墓誌（1977）
第４冊　日本古代の墓誌　銘文編（1978）
第５冊　古代の誕生仏（1978）

第６冊　飛鳥時代の古墳―高松塚とその周辺―（1979）
第７冊　日本古代の鴟尾（1980）
第８冊　山田寺展（1981）
第９冊　高松塚拾年（1982）
第10冊　渡来人の寺―桧隈寺と坂田寺―（1983）
第11冊　飛鳥の水時計（1983）
第12冊　小建築の世界―埴輪から瓦塔まで―（1984）
第13冊　藤原―半世紀にわたる調査と研究―（1984）
第14冊　日本と韓国の塑像（1985）
第15冊　飛鳥寺（1985）
第16冊　飛鳥の石造物（1986）
第17冊　萬葉乃衣食住（1987）
第18冊　壬申の乱（1987）
第19冊　古墳を科学する（1988）
第20冊　聖徳太子の世界（1988）
第21冊　仏舎利埋納（1989）
第22冊　法隆寺金堂壁画飛天（1989）
第23冊　日本書紀を掘る（1990）
第24冊　飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察（1991）
第25冊　飛鳥の源流（1991）
第26冊　飛鳥の工房（1992）
第27冊　古代の形（1995）
第28冊　蘇我三代（1995）
第29冊　斉明紀（1996）
第30冊　遺跡を測る（1997）
第31冊　それからの飛鳥（1998）
第32冊　UTAMAKURA（1998）
第33冊　幻のおおでら―百済大寺（1998）
第34冊　鏡を作る　海獣葡萄鏡を中心として（1999）
第35冊　あすかの石造物（2000）
第36冊　飛鳥池遺跡（2000）
第37冊　遺跡を探る（2001）
第38冊　‘あすか―以前’（2002）
第39冊　A0の記憶（2002）
第40冊　古年輪（2003）
第41冊　飛鳥の湯屋（2004）
第42冊　古代の梵鐘（2004）
第43冊　飛鳥の奥津城―キトラ・カラト・マルコ・高松塚（2005）
第44冊　東アジアの古代苑池（2005）
第45冊　キトラ古墳と発掘された壁画たち（2006）
第46冊　キトラ古墳壁画四神玄武（2007）
第47冊　奇偉荘厳山田寺（2007）
第48冊　キトラ古墳壁画十二支―子・丑・寅―（2008）
第49冊　まぼろしの唐代精華―黄冶唐三彩窯の考古新発見―（2008）
第50冊　キトラ古墳壁画四神―青龍白虎―（2009）
第51冊　三燕文化の考古新発見―北方騎馬民族のかがやき―（2009）
第52冊　キトラ古墳壁画四神（2010）
第53冊　木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち―（2010）
第54冊　星々と日月の考古学（2011）
第55冊　飛鳥遺珍―のこされた至宝たち―（2011）
第56冊　比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ―（2012）
第57冊　花開く都城文化（2012）
第58冊　飛鳥寺2013（2013）
第59冊　飛鳥・藤原京への道（2013）
第60冊　いにしえの匠たち―ものづくりからみた飛鳥時代―（2014）
第61冊　はぎとり・きりとり・かたどり―大地にきざまれた記憶―（2014）

飛鳥資料館　カタログ

第１冊　仏教伝来飛鳥への道（1975）
第２冊　飛鳥の寺院遺跡１―最近の出土品（1975）
第３冊　飛鳥の仏像（1978）
第４冊　桜井の仏像（1979）
第５冊　高取の仏像（1980）
第６冊　橿原の仏像（1981）
第７冊　飛鳥の王陵（1982）
第８冊　大官大寺 ―飛鳥最大の寺―（1985）
第９冊　高松塚の新研究（1992）
第10冊　飛鳥の一と―最近の調査から―（1994）
第11冊　山田寺（1996）
第12冊　山田寺東回廊再現（1997）
第13冊　飛鳥のイメージ（2001）
第14冊　古墳を飾る（2005）
第15冊　うずもれた古文書 ―みやこの漆紙文書の世界―（2006）
第16冊　飛鳥の金工海獣葡萄鏡の諸相（2006）
第17冊　飛鳥の考古学2006（2007）
第18冊　「とき」を撮す―発掘調査と写真―（2007）
第19冊　飛鳥の考古学2007（2008）
第20冊　飛鳥の考古学2008（2009）
第21冊　飛鳥の考古学2009（2010）
第22冊　小さな石器の大きな物語（2010）
第24冊　木簡黎明―飛鳥に集ういにしえの文字たち―（2010）
第24冊　飛鳥の考古学2010（2011）
第25冊　鋳造技術の考古学―東アジアにひろがる鋳物

師のわざ―（2011）
第26冊　飛鳥の考古学2011（2012）
第27冊　飛鳥の考古学2012（2013）
第28冊　飛鳥・藤原京を考古科学する（2013）
第29冊　キトラ古墳壁画発見30周年記念　白虎　玄武　朱雀　青龍（2014）
第30冊　飛鳥の考古学2013（2014）
第31冊　大和の美仏に魅せられて（2014）
第32冊　飛鳥の考古学2014（2014）

その他の刊行物（2014年度）

・奈良文化財研究所紀要2014
・奈文研ニュース№53～56
・埋蔵文化財ニュース№158～161
・奈良文化財研究所特別講演（東京会場）講演録『〈歴史の証人〉木簡を究める』
・第５回写真コンテスト展『飛鳥の甍マップ』
・『鏡に関する研究雑感』飛鳥資料館研究図録第18冊
・『平城京ビックリはくらんかい－奈良の都のナンバーワン－』
・『地下の正倉院展－木簡を科学する－』
・『発掘速報展平城2014　第１期』
・『発掘速報展平城2014　第２期』
・『仁和寺史料　目録編〔稿〕二』
・『ベトナム　カイベイ市集落調査報告書』
・『Village Surver Report in Cai Be　Tien Giang Province Socialist Republic of Viet Nam』
・『計画の意義と方法～計画は何のために策定し、どのように実施するのか？～』平成25年度遺跡等マネジメント研究集会（第３回）報告書
・『戦国時代の城館の庭園』平成26年度庭園の歴史に関する研究会報告書
・『世界遺産の文化的景観　保全・管理のためのハンドブック』
・『８世紀の瓦づくりⅣ―平城宮式軒瓦の展開２―6282-6721系―』第15回シンポジウム予稿集
・第18回古代官衙・集落研究会研究報告資料『宮都・官衙と土器（官衙・集落と土器１）』
・『現場のための環境考古学（携帯版）』
・『西トップ遺跡の調査修復に関する年次報告書　南祠堂解体編２』
・『Annual Report on the Research and Restoration Work of the Western Prasat Top Dismantling Process of the Southern Sanctuary Ⅱ』

人事異動
（2014. 4. 1～2015. 3. 31）

●2014年4月1日付け
研究支援推進部総務課課長補佐　南　幸一
研究支援推進部連携推進課課長補佐（兼）文化財情報係長　渡　勝弥
研究支援推進部研究支援課施設係長　水田康介
研究支援推進部総務課財務係主任　松本直也
機構本部事務局総務企画課（総務人事担当）併・東京国立博物館総務課　松岡広樹
（兼）都城発掘調査部考古第一研究室長　玉田芳英
都城発掘調査部考古第二研究室長　尾野善裕
埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長　小池伸彦
企画調整部主任研究員　石村　智
都城発掘調査部主任研究員　西山和宏
都城発掘調査部主任研究員　廣瀬　覚
都城発掘調査部主任研究員　青木　敬
文化遺産部建造物研究室研究員　海野　聡
都城発掘調査部遺構研究室研究員　鈴木智大
都城発掘調査部考古第一研究室アソシエイトフェロー　大谷育恵

●2014年4月30日付け
辞　職　赤田昌倫

●2014年5月1日付け
埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室アソシエイトフェロー　村田泰輔

●2014年6月30日付け
任期満了退職　渡邉淳子

●2014年7月1日付け
企画調整部展示企画室アソシエイトフェロー　中村　玲
企画調整部写真室アソシエイトフェロー　飯田ゆりあ
埋蔵文化財センター保存修復科学室アソシエイトフェロー　杉岡奈穂子

●2014年8月1日付け
都城発掘調査部考古第三研究室研究員　清野陽一
都城発掘調査部考古第二研究室アソシエイトフェロー　金　宇大

●2014年9月1日付け
都城発掘調査部考古第一研究室アソシエイトフェロー　浦　蓉子
研究休職　庄田慎矢（2016年８月31日まで）

●2015年1月1日付け
埋蔵文化財センター保存修復科学研究室アソシエイトフェロー　中島志保

●2015年3月31日付け
任期満了退職　松下迪生
任期満了退職　中島咲紀
辞　職　田代亜紀子
辞　職　南部裕樹
辞　職（転出）　上田浩司
辞　職（転出）　石澤　剛
辞　職（転出）　田中康成
辞　職（転出）　米野元則
辞　職（転出）　中野留美子
辞　職（転出）　平澤　毅
辞　職（転出）　森先一貴

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2014年度	2015年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	843,806	831,936
施設整備費	2,808,365	1,555,767
自己収入（入場料等）	34,983	34,983
計	3,687,154	2,422,686

土地と建物

単位：㎡

	土　地	建 物（建面積／延面積）	建築年
本館地区	8,860.13	現在、建替中	
平城宮跡資料館地区	※	13,328.49/21,394.61	1970年他
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2015年4月22日現在）

単位：千円

研 究 種 目	2014年度				（参考）2015年度			
	①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金		①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金	
	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額	件　数	金　額
基盤研究（S）	1	46,540	－	－	1	33,410	－	－
基盤研究（A）	4	41,210	－	－	5	47,710	－	－
基盤研究（B）	8	16,900	8 (8)	14,950	8	23,010	6 (6)	7,540
基盤研究（C）	－	－	7	8,710	－	－	10	12,350
挑戦的萌芽研究	－	－	1	1,560	－	－	2	3,250
若手研究（A）	3	4,550	2 (2)	3,640	2	1,696	2 (2)	3,120
若手研究（B）	－	－	18	18,244	－	－	15	11,570
研究活動スタート支援	1	910	－	－	－	－	－	－
奨励研究	－	－	－	－	2	1,100	－	－
特別研究員奨励費	1	567	－	－	1	1,560	－	－
研究成果公開促進費〈学術図書〉	－	－	－	－	1	1,400	－	－

※同一の研究課題で①と②の両方が交付されるもの（一部基金分）の件数はそれぞれに含み、②の件数の括弧書きは共通するものの内数である。

受託調査研究

単位：千円

区　分	2013年度		2014年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
研　究	28	186,599	28	187,199
発　掘	13	107,975	16	46,599
計	41	294,574	44	233,798

研究助成金

単位：千円

研究助成金	2013年度		2014年度	
	件　数	金　額	件　数	金　額
	11	8,540	5	3,984

※採択年による集計
※二ヵ年にわたる場合も初年度に計上

職員一覧

2015年4月1日現在

※(平):平城地区
(藤):飛鳥・藤原地区
(担):地区担当
(育):育児休業中
(兼):兼務

- 所長 松村恵司
  - 副所長 小野健吉
    - 研究支援推進部長 島田健治
      - 総務課長 臣守常勝
        - 課長補佐 南　幸一
          - 総務係長 桑原隆佳
        - 課長補佐 木村浩二
          - 財務係長 (兼)木村浩二
            - 主任 松本直也
            - 係員 北村加奈、高梨泰裕
      - 連携推進課長 津田保行
        - 課長補佐 梶原孝次
          - 経営戦略係長
            - 主任 高田幸恵
            - 係員 (育)真嶋明奈
          - 広報企画係長 (兼)梶原孝次
          - 文化財情報係長 (兼)渡　勝弥
        - 課長補佐 渡　勝弥
        - 課長補佐 松本正典(飛鳥・藤原地区担当)、車井俊也(飛鳥資料館担当)
      - 研究支援課長 今西康益
        - 宮跡等活用支援係長 江川　正
          - 主任 三本松俊徳
        - 施設係長 水田康介
        - 専門職員 本光秀明
    - 企画調整部長 杉山　洋
      - 企画調整室長 加藤真二
      - 文化財情報研究室長 (兼)森本　晋
      - 国際遺跡研究室長 森本　晋
        - 研究員 (兼) 田村朋美
      - 展示企画室長 (兼)加藤真二
        - 研究員 西田紀子／若杉智宏、中川あや
      - 写真室長 (兼)杉山　洋
        - 再雇用職員 (藤)井上直夫
        - 主任 中村一郎
          - 技術職員 (藤)栗山雅夫
    - 文化遺産部長 林　良彦
      - 歴史研究室長 吉川　聡
      - 建造物研究室長 (兼)林　良彦
        - 研究員 番　光
      - 景観研究室長 (兼)林　良彦
        - 研究員 恵谷浩子
      - 遺跡整備研究室長 内田和伸
        - 研究員 高橋知奈津
      - 主任研究員 中島義晴
    - 都城発掘調査部長 玉田芳英(担：藤原)
      - 都城発掘調査部副部長 渡邉晃宏(担：平城)
      - 考古第一研究室長 (藤)(兼)玉田芳英
        - 研究員 (平)(休)庄田慎矢／芝康次郎、(藤)和田一之輔／諫早直人
      - 考古第二研究室長 (藤)尾野善裕
        - 研究員 (平)小田裕樹／丹羽崇史、(藤)大澤正吾
      - 考古第三研究室長 (藤)清野孝之
        - 研究員 (平)石田由紀子、(藤)川畑　純／清野陽一
      - 史料研究室長 (平)(兼)渡邉晃宏
        - 研究員 (平)山本祥隆／桑田訓也
      - 遺構研究室長 (平)箱崎和久、(藤)(育)大林　潤
        - 研究員 (平)鈴木智大／海野　聡、(藤)前川　歩
      - 主任研究員 (平)馬場　基／神野　恵／今井晃樹／林　正憲／青木　敬、(藤)西山和宏／降幡順子／山本　崇／森川　実／廣瀬　覚
      - 庶務担当室長 (藤)(命)松本正典
    - 埋蔵文化財センター長 難波洋三
      - 保存修復科学研究室長 髙妻洋成
        - 研究員 脇谷草一郎／田村朋美、(兼)降幡順子
      - 環境考古学研究室長 (兼)難波洋三
        - 研究員 山﨑　健
      - 年代学研究室長 (兼)難波洋三
        - 研究員 星野安治
      - 遺跡・調査技術研究室長 小池伸彦
      - 主任研究員 金田明大／大河内隆之
    - 飛鳥資料館長 (兼)松村恵司
      - 学芸室長 石橋茂登
        - 研究員 (兼)西田紀子／(兼)若杉智宏
      - 庶務担当室長 (命)車井俊也

アソシエイトフェロー　髙田祐一

研究補佐員　佐藤由似

アソシエイトフェロー　中村　玲

アソシエイトフェロー　(藤)飯田ゆりあ

技能補佐員　鎌倉　綾

アソシエイトフェロー　菊地淑人

アソシエイトフェロー　(平)浦　蓉子、(藤)大谷育恵

アソシエイトフェロー　(藤)金　宇大

アソシエイトフェロー　(平)中川二美、(藤)山本　亮

アソシエイトフェロー　(平)井上　幸、(平)方　国花

アソシエイトフェロー　(平)村山聡子、(藤)福嶋啓人

アソシエイトフェロー　杉岡奈穂子、中島志保

アソシエイトフェロー　松崎哲也

アソシエイトフェロー　村田泰輔